

Fate/ture L

麻婆ピザ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それは、奇蹟が幾重にも編み上げられた物語。

舞台は関東圏にある、春戸市。

ベッドタウンとして最適地、と謳われている都市にて、聖杯戦争が始まろうとしていた。

伝説の真意。

迷宮に隠された真実。

真の結末。

純粹な思慕。

そして、本当の愛。

※ラーマとシータを会わせたいがために書き始めた小説です。

登場人物に関してですが、

・マスターは全てオリジナル。

・サーヴァントはランサー、キャスター、一部アヴェンジャーがオリジナル。

となる予定です。

※アインツベルンが復讐者を召喚し、かつ魔人アーチャーが召喚されていない。帝国陸軍とナチスが大聖杯を奪取したことによって生まれた平行世界、という妄想です。

※月一で更新できたらいいなあと思ってます。

# 目次

セイバー 初陣 1

セイバー 召喚 7

セイバー 初陣2 18

セイバー 追憶 22

アヴェンジャー 召喚 31

ランサー 胎動 34

バーサーカー 召喚 42

アサシン 暗躍 47

キャスター 召喚 51

キャスター 召喚2 63

セイバー 情報 72

ランサー 潜入 82

キャスター 夢見 88

マスター 神々廻誠(ししばまこと)

94

キャスター 登校 98

ランサー 咆哮 103

## セイバー 初陣

時刻は早朝。もうじき、日が明ける時刻。

住宅街の真つ只中の、とある二階建ての一軒家。その屋根の上に人影があつた。赤髪の少年が立っている。

白を基調とした装束。地面にまで及ぶ腰布。右手には、身の丈ほどはある剣が握られていた。二十一世紀の日本においては、明らかに異様な姿をした人物だ。

見た目こそは少年だが、彼から感じられる威圧は年相応のものではない。まるで歴戦の戦士や偉大なる王のそれだ。あまりにも歪な光景だった。

彼は神経を研ぎ澄ませて周囲を警戒していた。

『敵』が来ていることを察知しているのだ。

それも、すぐ近くに。

「凄まじい圧力だ。一国の王と見える。それも歴戦の勇者だな？　そうであろう？」

声量のある低い声を伴って、少年の前に巨躯の男が現われた。

屈強なその体躯は、少年の二回り以上は大きい。甲冑に身を包み、槍を携えていた。なによりも特徴的なのは、その赤い髭だ。彼もまた、常人ならば卒倒してしまうほどの

鬼気を帯びていた。

少年は警戒をさらに強め、剣を構える。

それを見た巨漢は、口角を静かに持ち上げた。

「我等の名はフリードリヒ・バルバロッサ。クラスはランサー。神聖ローマ帝国の皇帝である」

彼はそう名乗り上げると槍を構えた。

少年は驚きを隠せない。

「まさか、真名を口にするとは。さすがの余も意表を突かれた」

「我等は不意打ちの類を好まぬ。戦いとは正面から堂々と破るからこそ、面白いのだ。さらに言えば、真名を晒した程度で不利になるほどの弱点は持ち合わせておらん」

数瞬の間のあと、少年は爽快なまでに笑った。

相手の潔さに感服したのだ。

奇襲や不意打ちなど、やろうと思えばやれたはずだ。しかしバルバロッサは、わざと少年に接近を気付かせた。それどころか、真名を自分から教える始末だ。そのことを考慮すれば、バルバロッサは武芸を楽しむ者だと推測できる。

それは少年とて同じだ。かつて、戦いを楽しんでいた日々が彼にはあつた。サーヴァントとしての肉体は若き日の姿形。胸の奥底から、沸々と湧き出てくるものがあつた。

「失礼した、赤髭の王よ。汝の矜持、気に入ったぞ。いいだろう、ならば余も名乗るとしよう！ サーヴァント、セイバー！ コサラの偉大なる王、ラーマだ！」

今度はバルバロッサが目を開いて驚く。

「ラーマだと……？ コサラの王がセイバーを名乗るか。それは面白い組み合わせだ。如何ほどのものか、楽しみでもある」

「余も汝の槍術に興味が湧いた。異国の技術を体験させてもらおうとしよう」

その言葉を最後に、二人は押し黙った。

睨みあつたのは、ほんの一瞬。

先に動いたのはバルバロッサだ。直線的だが強烈な突きの一撃を繰り出す。岩など容易く貫いてしまうような鋭さだった。

対してラーマは、微動だにしない。決して、相手の動きに反応が出来なかつたというわけではない。むしろ、バルバロッサの動きはしっかりと捉えている。槍の矛先と、自身の剣先に集中しているのだ。

剣の刀身が火花を散らした。バルバロッサの槍はラーマの横を通り過ぎ、空を切る。ラーマは剣先のみを動かして、槍の軌道を変えてしまったのだ。剣先を当てるタイミング、角度、動かし方。様々な要素のうち一つにでも誤差が生じれば、この結果は生まれない。美しいと言えるほどの絶技だ。

最小限の動きで相手から優位を奪ったラーマは、間髪入れずに斬りかかった。突き振り終わりを狙った、相手の頭を両断できる絶妙な瞬間だった。

しかし、それをバルバロッサは柄で防いだ。いや、正確には柄尻の部分で弾いたのだ。振り切った直後、柄尻の方を持ち上げて剣の平に叩きつけるようにして打ち込んだ。そのまま槍を振り上げた形となったバルバロッサは、振り降ろしの一撃をラーマに加えた。

強引ではあるが、流れるような技の一連だった。相手に合わせて反応した動きではない。いくつもの予測を立てた上で、それらを実行している動きだった。

ラーマは振り降ろしを剣で受け止めた。重い衝撃。屋根の瓦に亀裂が入る。が、ラーマに動揺は一切見られない。彼もまた、こうなることはわかっていたのかもしれない。ラーマが剣を押し出すと、自分よりも遥かに大柄な男がわずかに揺らいた。その隙に距離を取った。

お互いに体勢を整える。

そして、両者は相手の力量を理解した。

時間にして一秒ほどだ。たったそれだけで強さを計った。

言葉を交わす必要はなかった。

踏み出す。タイミングは同時だった。



劍光が美しい曲線を描く。槍が雷のように走り抜ける。火花が散り、空を彩る。

劍と槍は幾合も重ねられた。その度に金属音が響く。足場の悪さなど意に介さず、二人は縦横無尽に駆け回る。技の限りを尽くして、相手に必殺の一撃を放ち続けた。

サーヴァントによる常識を超えた闘争は、永劫に続くかのように思えた。

だが、ラーマが相手の猛攻をかくぐり、間合いを詰めたところで状況は一変した。

ラーマの持つ劍の刀身が輝き出す。

「<sup>ブラフ</sup>マースト<sup>ラ</sup>、  
羅刹を穿つ不滅！」

ラーマの狙いは相手の心臓部。下方から劍を振り上げる。輝きと共に膨大な熱量が一気に解き放たれた。

バルバロッサは槍の柄で刃を防いだ。しかしながら、光の一撃は防ぎようがない。光の奔流に飲み込まれ、その力の勢いのまま上空へと放り出されてしまった。

光が消え去ると、バルバロッサのみが上空に取り残された。所々に火傷の痕が見られるものの、戦いに支障はないように見える。傷は浅い。

「小癩な！」

バルバロッサが吠える。声には、怒りと喜びの色が入り混じっていた。

屋根までの距離は、およそ二十メートル。バルバロッサはいつでも槍を放てるように空中で体勢を整えた。

狙うべく先は当然、決まっている——はずだった。

その対象が、ラーマが視界に存在していないのだ。

「今のは、回転がなかった。故に、威力が落ちた」

その声は背後からだ。バルバロッサは即座に視線を後ろへと向ける。

ラーマがバルバロッサよりもさらに上空にいた。距離は十数メートルほどあるだろう。

彼は手にしていた剣を掲げる。手を離すと、剣は浮遊してラーマの頭上で回転を始めた。

回転は加速し続け、やがて巨大な光輪となった。

バルバロッサが息をのむ。

「これこそは、羅刹王すら屈した不滅の刃！ くらえ！」

ラーマは大きく振りかぶり、バルバロッサに向けて光輪を投擲した。

「ブラフマー・ストラ羅刹を穿つ不滅！」

全てを塵に帰すほどの力がバルバロッサに迫る。

だが、かの皇帝は動じない。

彼は対抗して、槍を投擲する。

稲妻の如き一撃が、光輪に迫る。

## セイバー 召喚

春戸市。はるとその都市は、日本の関東に存在する。

春戸駅近郊は栄えており、人口も多い方だ。都心への交通の便が良いのでベッドタウンとして最適地と謳っている。だが、駅近郊から離れてしまうと畑や田園、雑木林などが目立ってくる。自然と文明。両極端な性質が混在しているその都市は、『異物』が紛れ込みやすい地でもあった。

春戸駅の近くにある、小さな喫茶店内。年季の入ったこげ茶色のテーブルやカウンター、椅子。どこかで見たことのあるような、スタンダードとも模範的だとも呼べる茶店だ。入ってすぐ右手側にテーブル席が二つある。その奥にはカウンターの席。左手側には、店の奥までテーブル席が並んでいた。

客は男性が二人のみだ。一番奥の席で神妙に語り合っていた。

「聖杯戦争？」

黒髪で眼鏡をかけた青年が聞き返した。痩せ型であまり日の光を浴びていないような肌。三白眼気味の目の下のくまがより一層、不健康さを漂わせていた。

一方、白髪の眉目秀麗な青年はコーヒーを一口に飲んでから、朗らかに返答した。

「そう、聖杯戦争。五十年ほど前にフユキという場所で行われた、七人の英雄によるバトルロワイヤル。勝利した者には、どんな願いでも叶える願望機——聖杯が与えられるぞうだ。すごくくない？ どんな願いもだよ？ しかもそれが、この春戸市で行われるって噂だ。誠くんも元魔術師だったよね？ 興味はない？」

誠と呼ばれた青年はため息を漏らした。彼は手元のカップを持ち上げると、コーヒーを口につけた。気持ちを落ち着けて、味を吟味するかのように思考を巡らせる。カップをテーブルの上に置いてから、言葉を繋げた。

「それって、根も葉もない噂ですよ？ 興味あるなし以前の問題ですよ」

「ホントだったら、どうする？」

「……神々廻家が魔術師だったのは祖父までの代です。両親は引き継いだと言っていますが、あくまで形だけ。俺なんかは魔術なんて使えないし、教えてもらってません。親が亡くなったと同時に、魔術師としての神々廻家は完全に途絶えました。つまり俺は魔術の知識がほんのわずかにあること以外、どこにでもいる普通の一般市民です」

「でもさ、魔術回路は持っているらう？ なら、参加資格はあるわけだ」

「参加資格が仮にあったとしても、そんな面倒ごとに自分から首を突っ込むほど若くないし、暇もないです。高校教師って大変なんですよ？」

白髪の青年はやれやれといった風のため息を吐くと、コーヒーを一息に飲み干して立ち上がった。

「まあ、興味があつたら相談してよ。万が一、参加するようなことがあつたのならば報告しておくれ。僕にとつてすごく有益なことなんだから」

「……まさか、創作のネタにでもするつもりですか?」

「そんなまさか。まさかそんな……ねえ?」

するつもりだ。

神々廻誠ししほまことは確信した。彼は自分を利用して新しい小説のネタを手に入れようとしていることがひしひしと伝わってきた。

「……ローランド先生の次回作は俺次第ってことですか? 作家って人種は抜け目がないというか、なんというか……」

「新作のネタ、大歓迎。お待ちしておりまーす」

宮崎ローランド。白髪の男性の名前だ。彼は近頃、人気が出てきている小説家だ。本屋に行けば彼の作品の特集コーナーがある。小説に限らず、映画の脚本や漫画の原作にも手を出している。やり手で注目度の高いクリエイターだ。

神々廻誠と宮崎ローランドの出会いのきっかけは数年前。ローランドが高校の取材をアポなしで求めてきたところから始まる。第一印象はいい加減という言葉だけでは

すまされないレベルで失礼な人間。学校とはまったくの無関係な人間で、ましてや当時はクリエイターとして彼は有名ではなかった。そんな得体の知れない人物を易々と見学させられるわけにもいかず、何度も断った。しかし、なかなか彼は引き下がらない。学校側はしかたなく、監視付きで学校の見学を許されたのだ。その時の担当が神々廻誠だ。嫌々ながらもローランドと接するうちに、作品作りに対する情熱が並々ならぬものであるということが分かった。

第一印象で得た評価が変わることはなかったが、悪い奴ではない。そう思える間柄となり、現在のようになんかの付き合いが生まれたのだった。

噂話や都市伝説などの真偽不明かつ不確かな情報を追いながらも、それらを糧に文章を書いて食い扶持にしている。遅しく凶太く生き抜く姿に尊敬とまではいかないが、神々廻誠は評価していた。

——しかし、まさか……聖杯戦争という言葉が出てくるとはね……

さきほどのローランドとのやり取りをぼんやりと思い浮かべていた。会計を済ませた彼がニツコリと笑って喫茶店を出て行ったのが妙に印象的だった。

だが、聖杯戦争など、今の彼にとつてはもはや関係のないことだ。夜は明日の仕事の準備。それを済ませたら夕飯。あとは寝るだけ。また一週間、高校教師として頑張る——つもりだった。

自宅である、二階建ての一軒家に着いた頃合い。夕暮れ時に異変に気付いたのだ。

ふと、右手の甲に違和感を覚え、見遣る。するとそこには、見たことのない紋様が浮き出ていた。

——嘘だ。

彼の心臓が高鳴る。気付けば家中を駆け回り、とある資料をかき集めていた。一階と二階はもちろん、両親が亡くなつてから入つたことのない地下室まで。

聖杯戦争に関する資料をかき集めたのだ。

時間も空腹も忘れて読み耽り、必要な知識をあらかじめ詰め込んだ。右手の紋様は聖杯戦争の参加資格とでも言える、令呪であることがわかつた。サーヴァントを召喚し、それを使役するマスターたる証。そして、ルールも知り得た。形式上ではあるが、聖杯戦争という儀式を円滑に遂行するための監督役がいるようだ。戦闘によつて引き起こされた事件の隠蔽、サーヴァントを失つたマスターの保護などを行うために必要な存在のようだった。この聖杯戦争にも監督役がいるのであれば、闘争から降りて保護してもらうことも可能だ。

だが、神々廻誠はそうしようとは考えなかつた。

——どんな願いでも叶える。勝利者に与えられる聖杯は、どんな願いでも。

抗えなかつた。抗いようがなかつた。ほんのわずかな期待であつても。浅はかな夢

だったとしても。淡い希望を抱く限りは。普段はどこか無気力で、感情的になるようなことは一切なかった。いかなる時であつても、全力という言葉から二歩も三歩も遠ざかる性質を持つていた。そんな彼を願望機という代物が変わえようとしていた。

そこに願ひがある。理由はそれで十分だ。神々廻誠は躊躇い、惑い、悩みはしたけれど、導かれるようにして歩んでしまった。結果がどうなるうと。過程がどうなるうと。『至りたい場所』を目指すべく。

地下室にて、誠は資料を片手に魔法陣を描いた。

必要な物は全て揃つていた。

魔法陣を描くための媒体。描き方。詠唱の呪文。

そして、触媒。半分に折れた弓の片割れだ。

どの英霊が召喚され、どのクラスで現界される可能性が高いかも、全て資料に記されていた。

なぜここまでの準備が為されていたのか。答えは簡単だった。かつて神々廻家は冬木で行われた聖杯戦争に参加したからだ。当時の神々廻の当主——誠の曾祖父にあたる人物はマスターとしてサーヴァントを召喚し、争つた。その結果、当主は死亡した。戦争の決着やその後、聖杯がどうなつたかまでは誠は知らなかった。

準備が整う。



誠は深呼吸をした。紡ぐ言葉は少しだけ震えていた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公——」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

次の瞬間、燦々たる白光が室内を包んだ。目がくらむと同時に、誠は片膝をついた。立ち続けることが厳しいほどの疲労感に襲われたからだ。息が乱れ、知らず知らずのうちに汗をかいていた。

発光が収まった。

煙を伴って現れたのは、少年の姿だった。

燃えるような赤い髪。揺らめくさまはまさしく炎のようだった。白を基調とした装束が、その赤髪をより際立たせる。地面にまで及ぶ腰布は上半分が黒、下半分は橙色となっていた。裏地も同じ橙色となっている。その風貌からして、貫禄や高貴さが伝わってくる。呼び出した者の偉大さが容易に想像できてしまうほどに。

しかしながら、顔立ちは中性的で整ってはいるものの幼さが目立っていた。

目を瞑っており、まだ反応はない。眠っているかのように静かに佇んでいる。

身長は百七十センチほどだろう。背丈や顔立ちから判断しても、やはり十代半ばくらいの年齢にしか見えない。

「汝が余のマスターだな？」

サーヴァントである少年はそう言いながら、ゆっくりと目を開いた。

薔薇色の瞳。威圧感、いや、存在感とでもいうべきか。見た者を圧倒する、王たる資質を感じさせる力。それでいながら、傲慢や軽侮といった色は一切ない。真つ直ぐで濁り気のない瞳に、誠は眩しささえ覚えた。

反応のないマスターに、サーヴァントは微笑みながら歩みよった。

「心配するな。余は偉大なるコサラの王、ラーマだ。出会ったばかりの者をいきなり襲うようなことはしない。それと、汝が余のマスターであるならば畏まることもない。た

だ、余と共に並び立つてくれれば、それで良い」

ラーマは手を差し伸べる。

やや堅苦しさはあるものの、相手を気づかうような声と態度だった。誠は、そこでようやく安心感を覚えた。驚異的な存在でありながら、敵意や害意は一切ない。むしろ、優しさすら感じるのだ。不安、疑念、緊張……そういった心を圧迫するものが取り除かれた。それだけの力を、ラーマは持ち合わせていたのだ。

——これが、英雄。

深く安堵した誠はコクリと頷いた。

「よし、肯定だな？　ならば契約は成立だ」

足に力を入れる。

そして、伸ばされた手を掴もうとして——倒れた。

突然のことに呆気にとられたラーマだったが、すぐさまマスターの異常に気がついた。

「マスター？　おい、大丈夫か、マスター！　しっかりしろ！」

誠が倒れたのは必然だ。

時刻は朝の四時を過ぎていた。家に帰宅したのが夕刻くらいであり、そこから休憩も挟まずに動き続けていたのだ。蓄積された疲労と睡魔は相当なものだ。おまけに慣れ

ない魔術の行使。疲労は計り知れない。

それを退け、意識を保っていた要因が極度の緊張感だった。だが、今やその緊張感を取り除かれた。安心で満たされてしまった誠の精神には抗う術がなかった。

ラーマは慌てふためいていた。彼がマスターの倒れた原因など知る由もない。そのため、どのようにして対処すべきなのか、咄嗟に判断できなかつたのだろう。焦っているのが伝わってくる。とにかく心配そうに声をかけてくれたことを、誠はぼんやりと記憶していた。

——ああ、歴史に名を残すような大英雄であつても、表情は豊かに変わるんだな。それなら普通の人間とそう大差はないのかもしれない。

と、そんなことをのんびりと思ひながら、誠の意識は遠のいていった。

※

マスターが倒れるというのは、ラーマにとっては予期せぬ事態だった。狼狽してしまい、どのように対処すべきか困ってしまった。しかし、すぐに安らかな寝息が聞こえてきたことよって、ひとまずは安堵した。

疲れ果てて眠っているだけ。そのことに気付いた。

「やれやれ、人騒がせなマスターだな」

ラーマが微笑んだのも束の間。彼の表情が険しくなった。

殺気だ。尋常ならざる威圧を孕んでいる。相手との距離も掴めておらず、おおよその方角を察知できる程度だ。

「気取られたか……!」

おそらく相手はサーヴァントだ。この殺気は自分に向けられているものはず。

呼ばれて早々に戦闘。そのことにラーマは不満を感じなかった。

人生の一番大切な時を戦いの中で過ごした彼にとって、戦うこととは当たり前のことなのだろう。

「さて、行くか!」

気を引き締め直したラーマは、家の屋上へと向かう。

切なる願いをその心に宿して。

## セイバー 初陣2

さながら雷撃を思わせる槍が、光輪と激突した。

衝撃は大気を震わせたが、一瞬のできごとでしかない。槍は弾かれ、地に落ちていく。光輪はバルバロッサを縦に引き裂いた。

二つに分かれた肉体は屋根の上を三度ほど跳ねた後、地面へと落下していく。それを見届けたラーマはようやく緊張を解いた。

屋根へ着地すると、低速の回転となった剣が彼の手元にまで戻ってきた。  
羅刹ブラフマーを穿つ不滅ストラ。

それは魔王ラーヴァナを倒すために、生まれた時からラーマが身につけていた『不滅の刃』だ。

元々は魔性の存在に対して絶大な威力を誇る矢だ。それを無理やり剣に改造したため、投擲武器としての側面が強く残ったのだろう。

——まずは一騎か。

決して楽な戦いではなかった。判断を誤れば、この勝利は得られなかった。間違いない強敵だった。けれど、今回の闘争は楽しいと感じられた。闘いやすい相手だったこと

が原因かもしれない。

この先の闘いはもつと苦しくなるはずだ。単純な戦闘のみならず、策謀や罠といった  
搦め手もあるだろう。

この勝利に酔いしれず、気を引き締め直さねばならない。  
そう決心した直後だ。

背筋が凍りついた。

不思議なことに、気配はない。

視界や音は？ どれも正常だ。殺意は？ 感じられない。

危険はない。脅威となる者が存在しない。

にも関わらず、ラーマはこの胸のざわめきを拭えない。嫌な予感がする。

——来る。

ラーマは咄嗟に右方向へ飛んだ。気のせいであれば、それでよし。無意味な行動で  
あつたとしても、恥じることはない。自らの直感を信じた。

己が居た位置を見遣る。するとそこには、一本の槍が空を切っていた。

そう。フリードリヒ・バルバロッサが、槍を突いていたのだ。

混乱する頭が状況を理解しようとするよりも早く、体が動いた。

相手に向けて剣を一閃。されど、刃は虚しく空を裂いた。

「やはり、難しいか」

抑揚のない声は後ろから届いた。バルバロッサはラーマの後方に移動していたのだ。感情のない瞳でこちらを見ていた。

ラーマは振り返り、構える。冷たい汗が伝うのを感じ取った。

距離は五メートルほどだろう。互いの武器が届く位置だ。

沈黙が続いた。空気が張り詰める。

「悪いが目的は済んだ。さくらばだ、コサラの王よ」

それだけを言い残して、バルバロッサは去っていった。

あまりにもあっさりとして引いてしまった。そのことに、ラーマは呆気に取られていた。

すでに心配がない。探したところで無駄だとラーマは感じた。

いくつもの疑問だけが残った。

最後の背後からの一撃。これは明らかに質が違う。幾合も剣と槍を重ねたがゆえに、はつきりとわかった。まるで別人だ。

正面突破を好む、威風堂々とした男。

隙あらば背後からでも襲う、影のような男。

姿は同じでも、果たして本当に同じ人物なのか？

そして何よりも、バルバロッサが復活したことだ。彼は、たしかに両断されたはずだ。



サーヴァントといえど、修復が困難なほどに。一体どういうカラクリがあるのか？ なるか見落とした点はないのか？

情報が少ない。足りない。いくら考えても、疑問は増え続けるばかりだった。

ふと、魔力消費が激しかったことに思い至った。魔力はマスターから提供されているため、使い過ぎれば命を削りかねない。心配になったラーマはマスターの元へと駆ける。

ついでに、勢い余って家まで両断したことを、どのように説明するか。謝罪の方法も含めて、ラーマは考えを巡らせていた。

## セイバー 追憶

広場にポツンと、弓が置かれていた。弦がつけられていない巨大な弓。数千人という人々がそれを中心に取り囲んでいた。

そこから離れた位置にある、近くの王宮からは群衆を見渡すことができた。王とその娘、赤髪の少女が弓を見守っていた。

群衆の中から一人の少年が歩み出る。

赤髪の少年。十四歳くらいの、まだ幼き子供だ。

周囲がどよめく中、彼は無造作に、左手一本で弓を持ち上げた。

すると、歓声が一人の少年に浴びせられた。

少年が弓を持ち上げたただけだというのに異様なまでの盛り上がりだ。しかし、その称賛の嵐は起こるべくして起こったものだった。

なぜなら、その巨大な弓——シヴァ神の弓は、屈強な大男たちが数百人いて初めて持ち運べる物なのだから。幾人の王子が神弓を手にしたが、持ち上げることができた者はごくわずかだった。

様々な情念がその場に溢れていた。羨望や後悔。嫉妬と怒号。歓喜や敬意。実に多

くの感情が一人の少年にぶつけられた。並の精神であれば、その重圧に負けてしまい、腰を抜かしていたことだろう。

しかし、少年はまったく動じない。

おそらく彼にとつては、これが出来て当たり前なのだろう。周りの声など気にするまでもないのだ。驚くほどのことでもなかったはずだ。

弦を張るため、弓を両手で持つて力を入れた。弓は徐々に曲がっていく。歓声は高まるばかりだった。

そこでふと、気になる視線を感じた。

一際、熱のこもった視線。これだけ大勢の視線の中で、決して埋もれることのない視線。

少年はその視線を感じる方へと頭を動かした。

群衆を見下ろす王の隣。

赤髪の少女と目が合った。

ここで初めて、少年は動じた。

頭が真っ白になった。目が離せない。心臓ははち切れんばかりに騒ぎ出す。手を動かしていることすら忘れるほどに、彼は夢中になっていた。

そして、雷鳴の如き爆音が轟いた。彼の意識がようやく弓へと移る。

神の弓は真つ二つになつていた。

彼は顔を青ざめさせてから、再び王宮の方を見遣つた。

赤髪の少女は笑みを浮かべていた。驚きと喜びの色が混じりあつた笑顔だ。

少年はつい、つられて笑つてしまった。

歓声が、また強くなつた。

※

ふいに覚醒した誠は、むくりと半身を起き上がらせた。

視界に入るのはいつもの風景。二階の自室だ。広さは八畳ほどだが、生活するのに必要最低限の物しか置かれていない。まるで生活感のない無機質な部屋。自分は窓際のベッドに寝ていたことに気付く。

そう、それが現実。

数千人に及ぶ人ばかり。大きな弓。王宮。喝采。熱気。そして、赤髪の少女の笑顔。ついさつきまで見ていた光景が夢であつたと気付く。自分は現実に戻された。だが、夢と言うにはあまりにも鮮明で、記憶と言うにはあまりにも非現実的。全く以て見覚えのない景色なのだが、体験してきたかのように頭の中へと刻まれていた。

思い当たることがあつた。

サーヴァントとマスターは契約した段階で魔力供給のパスが通っている。その影響

により、互いの記憶を夢という形で見ることもあると言われている。

つまり、誠はラーマの記憶の一部を垣間見たのだ。

「目が覚めたか、マスター」

頭の中に声が響いた。

すると直後に、誠の隣にラーマが突如として現れた。

サーヴァントは不可視かつ物理的な干渉ができなくなる『霊体』、仮初の肉体を得る『実体』の二つの状態を取ることができる。ラーマは霊体化していたがために、今まで姿が見えなかったのだ。

相変わらずの存在感に少し怯んでしまった。しかし、今度こそ声を発することができた。

「あの、すみませんでした……いきなり倒れてしまっ……その、魔術とはほとんど縁がなく、慣れていなかったものですから……」

「ほほう、召喚のための儀式は上手くこなせていたように思ったのだが、魔術とは縁がないとはな。汝は魔術師ではないのか？」

「えつと……自分の両親の代で、魔術師としての家系は途絶えました。言いにくいのですが、魔術師として私にできることはなにもないのです……申し訳ありません……きつと、足を引つ張ってしまうかと——」

「大丈夫だ、全く問題ない。戦闘に関しては、余に全て任せるがいい。どれほどの難敵であろうとも、必ずや勝利してみせよう」

誠はラーマの器の大きさにただただ感服した。

古き王という存在は時として、マスターとサーヴァントの立場を逆転させてしまうほどの力を持つ。性格が合わない。機嫌を損なう。あるいは単なる気まぐれ、余興。そういった理由だけで裏切られ、殺されることもあるだろう。

だがラーマは違う。マスターを対等な立場として扱ってくれている。目的のために共に歩もうと示してくれていた。普通の魔術師であればそれは鬱陶しいものかもしれないが、誠にとってはありがたいものだった。

普通の魔術師とは違い、神々廻誠には最低限の知識があるだけだ。能力的には一般人と大差がない。この先の争いでお荷物となる自分を認めてくれるだけでも嬉しいことだった。

「お心遣い、感謝します」

「よい、気にするな。そういえば、まだマスターの名を聞いていなかったな」

「神々廻誠と言います」

「よし、マコトだな。これから、よろしく頼む。ところで……」

ラーマは誠の枕元にあつた物を指で差した。

「この機械なんだが、ずっと唸っていたぞ？」

「え……」

ラーマが指摘した物は携帯電話だ。

続けて、彼は得意気に語りだした。

「これはこの時代において一般的な連絡手段なのだろう？ 魔術もなしに、遠く離れた相手とも瞬時に連絡を取れるとは便利な物だ。英霊の座から、ある程度の知識は与えられているのでな。余は聡明ゆえ、この程度のことでは驚かんぞ。それにしても、昼時になると言うのに連絡相手は随分とまめな人物なのだな」

「昼……？」

誠は血の気が引いていく感覚を嫌というほど味わった。

携帯電話の画面を見る。時刻は十二時を過ぎていた。着信履歴は勤務先の高校からでいっぱいだ。もはや遅刻どころの騒ぎではない。誠は急いで着替え始めた。

「マスター？ どうしたんだ？」

「し、仕事が！ 寝坊です！ 急がないと！」

「そ、そうか。察するに、よほどの一大事なのだな。聖杯戦争のことについて話したいこともあるのだが……」

「スイマセン！ 帰ってから詳しく話しましょう！」

スーツを着た誠は仕事用のカバンを持った。携帯電話を操作しながら、慌ててドアを開け放った。

「あ！ 待つてくれ、マスター！ 汝に言うべきことがある！」

「ちよ、ちよつと待つてください！ 移動しながら聞かせて頂きます！」

部屋を出れば、廊下が右手側にまっすぐ伸びている。廊下の一番奥に階段がある。行き着くには、二つの部屋を通り過ぎる必要があった。

足早というよりは、ほぼ走るように廊下を進む。仕事先の高校へ電話をかけた。謝罪や言い訳、今日の予定が頭の中を駆け巡る。

余裕のない誠は周囲の異変に気付いていなかった。

隣室のドアを過ぎた直後、誠の視界は縦に大きく揺れた。

彼は、廊下で足を踏み外したのだ。

情報の処理が追いつかなかった。頭の中は真っ白だ。何の抵抗も見せずに廊下から一階へと落ちていく。初めて経験する浮遊感。その時、一メートルほどの大穴が廊下にてきているのをようやく認識した。いや、廊下だけはない。その大穴に沿って、壁と天井もなかった。まるで、切り取られたかのように。消失していた。

そう、家が割れていた。

縦に両断されていたのだ。



「無事か？ マスター？」

一階の床に落ちる寸前のところで、ラーマが誠を抱きかかえる形でキャッチした。

「あの……これは、いったい……？」

呆然としている誠は、その言葉を絞り出すのだけで精いっぱいだった。

ラーマは申し訳なさそうに目を逸らした。

「ああ、すまない。最初に伝えるべきだった。汝が気絶してからすぐに、他のサーヴァントと交戦したのだ。撃退には至らず、撤退はさせたものの……その……勢い余って住まいを斬ってしまった」

頭が重い。誠は再び気絶しそうだった。

魔術とは秘匿されなければならない。一般人には悟られないように徹底するべきものである。そうでなければ、魔術の価値が薄れてしまうからだ。もちろん、聖杯戦争も例外ではない。むしろ、一般に対しては秘匿中の秘匿だと、資料には書かれていた。

誠は巻き込まれたようなものではあるが、そのルールから逸脱してはいけないということだけは資料を通してわかっている。度が過ぎれば、協会と呼ばれる組織などから粛清されてしまう可能性も否定できない。

たとえば誠の自宅でサーヴァント同士による戦闘が行われようと、それが丘の上にはぼつねんと佇む家ならば問題にはならないだろう。が、この家は住宅街のほぼ中心にある。

両隣、道路を挟んで前の住宅、後ろの住宅。そんな場所で早朝の六時に戦闘を行った。目撃されていてもおかしくない。

懸念事項が秒単位で増える。

「マスター、しつかりしろ！　だ、大丈夫だ！　住まいの破損くらい、余がなんとかしてみせよう！　そうだ、今よりも豪勢に改修してやっても良いのだぞ！　なあ、マスター！　頼むから、気をたしかに持ってくれ！」

ラーマが必死に呼びかけていたが、誠は反応できなかつた。正確にはどうすればいいのかわからなかつたのだ。なにをするべきなのか、頭が浮かばなかつた。

すぐそばに落ちている携帯電話から発せられる怒声を、ぼんやりと聞いていた。

## アヴェンジャー 召喚

「はは、やったぞ、成功だ。ははははは、勝てる！ このサーヴァントでならー！」

打ちつ放しのコンクリートに包まれた狭い部屋。明かりはパソコンの明かりのみ。白衣を着た男が不気味なまでに笑い続けていた。

冷え切った室内とは裏腹に男の哄笑は、とある感情の熱で溢れている。

「ははは！ 後悔させてやる！ 僕に令呪と復讐の機会を与えた、そのことを！」

男の傍らには人影があった。背丈が百八十センチ以上はある、細身の青年。緑がかつた黒の礼装服。同色のマントとシルクハットを着こなす姿は一見すれば紳士の出で立ちだ。しかし、彼は尋常ならざる気配に満ちていた。瞳は凍てつくほどの威圧感を孕んでいると同時に、燃え盛るような憎悪に囚われている。静かに佇んでいるだけ。それだけのはずなのだが、全身から放たれる気魄によって獰猛な獣と対峙しているかのような錯覚に陥ってしまう。

静けさと激しさを併せ持つ青年——サーヴァントが、口を開いた。

「俺を呼んだ貴様は、何を為し遂げるつもりだ？」

よく通る声だった。相手を選定するためなのか、峻厳や凄烈といった色が含まれてい

るように感じられた。気の弱い人間であれば、声を発することすら難しいだろう。あるいは、卒倒してしまうかもしれない。

しかしながら、男は物怖じせずに答えた。

「決まっている。復讐だ。サーヴァントとしてのお前は、その権化のようなものだろう？」

「そうか。俺を呼ぶに相応しい理由があるようだな。だが、貴様の願望はそれだけか？ 聖杯になにを望む？」

「願望？ 聖杯？ そんなものはない。いらない！ いるはずもない！ 必要なのは、復讐を果たすための憎悪だ。それを為すための手段と力だ！ 聖杯は壊す！ 徹底的に！ くくつ、そうだ、壊すんだ！」

狂気を纏った笑みを浮かべながら、マスターである男は答えた。

サーヴァントの表情に変化はない。品定めでもしているかのように、マスターの顔を見つめ続けていた。

「では、復讐を果たした、その先は？」

「その先？」

白衣の男は静止した。

空白。虚ろな瞳でサーヴァントを見返す。

「ない、な」

男はぼそりと呟いた。

先ほどよりも激しく、怒りに満ちた笑みを浮かべる。

「ない。ないぞ！ 『先』 など必要ない！ 必要なのは『今』だ！ 必要ならば、未来すらも燃料にしてしまえ！ 復讐さえ叶えば、燃え尽きてしまってもいい！」

紳士姿のサーヴァントは高らかに笑う。

自らのマスターに、共感できる部分があつたのかもしれない。

アヴェンジャー  
復讐として、サーヴァントがマスターを認めたのだ。

「クハハハ！ いいだろう、マスター。貴様の復讐すべき相手の名は、なんだ！」

「復讐の対象者……それは間違つて生まれたモノ。出来損ないで、失敗作で、欠陥品のホムンクルス……そのモノの名は——」

## ランサー 胎動

四月十七日。金曜日。十九時三十分。

春戸駅からほど近くにある、二階建ての木造アパート。部屋数は各階、三部屋ずつ。築二十年以上は経っており、みすぼらしい外見をしていた。そのアパートの間取りは全て1LDKとなっている。玄関、ダイニングキッチン、リビングルームが縦に連なっていた。

そして、二階の三号室に住むパウラ・シュペーアという少女は気怠そうにベッドで横たわっていた。

端正な顔立ちは芸術の域に達している。化粧をせずとも、すでに美しく完成されているのだ。重そうに半分だけ開いた目からは、ガラス細工を思わせるような青い瞳が覗いていた。彼女の美しさは顔の造形だけにとどまらない。雪を欺くほどの白い肌。極上の絹糸のような金色の長髪。年齢こそは少女だが、バランスの取れた女性的な肉体をしている。それは、世の男性の欲望を具現化させたかのような完璧さだった。白いTシャツとホットパンツという出で立ちが、その肉体美を惜しみなくさらけ出している。

しかし、それに反して室内は汚い。物が散乱しており、整理整頓からは程遠い。彼女

の美しさと部屋の乱雑さは、まるで似つかわしくない光景だ。

彼女は体をごろりと転がす。金色の髪がさらさらと波打つ。仰向けになって天井を見つめた。

遠くから、階段をのぼってくる音が聞こえた。

頭だけを左へと動かす。視線の先にあるのは玄関だ。

足音。軽い音。速度は並。急いではない。

音は玄関前でパタリと途切れた。

パウラはすでに、誰が来たのかを悟っていた。

感情を読み取らせない表情のまま、彼女はのそりと起き上がる。

チャイムの音が鳴り響いた。

「おーい、パウラちゃん」

陽気な高めの声。次いで、ドアを叩く音。やっぱり七次滯が来た、とパウラは思った。

チャイムを鳴らすだけで十分だろうか？ でかい声。ドアを叩く意味はあるのか？

ああ、追い返すのが面倒だ。迷惑。帰れ。などと、パウラは心の中で悪態をつきながら物音ひとつ立てずに玄関まで歩いた。

ドアをほんの少し押し開ける。顔と右肩だけを外にさらした。今日ばかりは絶対に部屋へ侵入させない、という意味表明がひしひしと伝わってくる。

「やつほーこんばんはー! パウラちゃん、病気は治った? 元気になった? ご飯、ちゃんと食べてる?」

不機嫌そうに眉根を寄せているパウラに対して、七次滯は朗らかな笑顔で迎えた。

黒髪のセミロング。目尻の下がった目つき。特徴的な部分と言えばそれくらいであり、身長は百六十センチ程度の標準的な体型をした少女。紺のブレザー。白のシャツに赤いリボン。緑を基調としたチエツク柄のスカート。紺色のカバン。

愛嬌のある笑顔が似合う、ごく普通の女子高生だ。

「……滯、悪いけど——」

「しゃべった!」

「当たり前だ」

「私さー、パウラちゃんが病欠って聞いてから、ずっと心配してたんだよー? 新学期が始まってすぐに休んじゃうんだもん。それも、一週間もだよ? パウラちゃんのこと気がなっちやってご飯が進まないわ、あんまり楽しく感じないわ。なんのために学校へ通ってるのか、わかんなくなってきたよ……」

「学ぶためだ」

「病気ってことだから、金曜日まで家に行くなーって先生に止められちゃったし。パウラちゃんは家事が苦手なんだから、余計に気がかりだったんだよねー」



「余計なお世話だ」

「でも元氣そうで良かったー」

「……………で、用件は？」

「そうそう、そうだった。パウラちゃんにお届け物！ プリント！ しゅつくだーい！  
はい、どうぞ」

漣はいくつかのクリアファイルをかバンから取り出した。パウラは受け取るために、  
ドアをさらに開いた。受け取ったクリアファイルに目を通していく。

「あー……………ん？」

「あ、それね、提出日ごとに分けといたから！ 付箋に書いてある日付が提出日ね！ 科  
目はバラバラだから気を付けて？」

「あー……………」

「あとねー、今日は委員会を決める日だったんだけど、パウラちゃんは図書委員会になっ  
ちやつた。大丈夫？」

「ああ……………」

「さつすがパウラちゃん！ 話が分かる！ 進級して早々にやることいっぱい参っ  
ちやうよねー。いきなり宿題とか、先生たちは気合入り過ぎだよー」

パウラの必要最低限な受け答えに対して、漣は余計な情報を交えつつ話を進めた。こ

れでどうして会話が成立するのか不思議ではある。

話を聞いている途中で、パウラはハツとなった。

気付かぬうちに相手のペースに乗せられていることに気付いたのだ。

コイツはいつもそうだ。人のプライベートにズカズカと入り込んでくる。喋り倒す。言いたいことを言ったら勝手に満足する。マイペース。空気を読まない。能天気。

——友達想い。

パウラは苛立った。左手を強く握る。

滯は無邪気な笑みを浮かべながら、パウラの部屋を覗き見ようとした。

「お部屋、散らかってない？ 今日も、お掃除を手伝ってあげよつか？」

「……ダメ」

強めの口調でパウラは返す。滯の笑顔に、少しだけ困った色合が加わる。

「ちよつとくらい、いーじやーん……」

「病み上がりなの。今日は帰りなさい」

「えー……そんな硬いこと言わないでさー」

「帰れ」

「あ、はい……帰ります……でもでも、明日は土曜日だから来てもいいよね？」

予定

「ないよね？」

「病み上がり。来るな」

「あ、すみませんわかりました退散します……」

トボトボと漣は来た道を辿っていく。ただし、一歩だけ進んではチラリチラリと振り向いていた。

パウラは胸のあたりが締め付けられるような感覚を得た。知らず知らずの内に、「漣」と呼び止めてしまった。

彼女は。パアツと表情を明るくさせて振り返った。

「……アリガト……またね」

パウラにそう言われただけでも嬉しかったのか、漣は手をブンブンと元気よく振った。

「まったねー！」

漣は軽快なテンポで階段を駆け降りて行った。

ドアを閉めた。パウラは、その場でペタンと座り込む。

余計なことをしてしまった。

後悔が心をジワリと染め上げていく。

「今のが、貴様なりの友との別れか？」

重低音の声が脳内に響いた。

パウラは唇を強く噛んだ。少量の血が滴り落ちる。

「ランサー。私に友人はいません」

「では、あの小娘はなんだ？」

「あれは、ただの知人です」

くつくつと笑う声があった。

パウラ自身、苦しい言い訳だと感じた。笑われてしまっても仕方ないことだ。恥ずかしさが込み上げてくる。表情に出てこなかったことが彼女にとって救いだっただかもしれない。

「まあ、良い。そういうことにしてやろう。それよりも、今宵から動くのであろう？ 昨夜、召喚されてから我等は暇オレを持って余しているのぞな」

パウラは気持ち切り替える。

全ての感情を頭の隅へと追いやり、自らの使命だけを考え始めた。機械的に、意思など捨てて、淡々と。

「はい。心身共に万全です。動くのならば、今夜からが最適かと」

「よかろう、貴様の方針に従ってやる」

「ありがとうございます」

「さて、あとは強者と巡りあう幸運があればよいのだがな」

「ランサー。何度も言いますが我々の目的は、あくまで——」

「分かっておる。目的は承服している。必ず果たす」

パウラは息を深く吐いた。全身の力を抜いて緊張を解く。そして、彼女は立ち上がった。

すると、目の前に大柄の男が姿を現した。甲冑を着こんだ、赤い髭の男。

「やれやれ。聖杯戦争に呼び出されたかと思えば、マスターは人形の如き小娘。その目的が聖杯の破壊とはな。難儀なものよ」

不服そうに彼は語るが、その目にはささやかな期待の色が見えた。

聖杯という餌に群がる、極上の強者。

英雄たちとの死闘を望む者が動き出そうとしていた。

## バーサーカー 召喚

何度も生んだ。

何度もここで生まれた。

何度もここでまぐわった。

何度も何度も何度も、新しい命がここで誕生した。

だけど、全て私の手から離れていく。

夫が持ち去っていく。愛しい子供たちを。連れ去っていく。

どこにいるのか？ 何をしているのか？ どれだけ成長したのか？

知らない。関われない。教えてもらえない。

夫が私に与えたのは、八畳ほどの広さの部屋。硬いベッドが端に置かれていて、真ん中には小さな丸いテーブル。座布団。壁際に冷蔵庫。そして、片隅にはトイレがあった。

結婚してから部屋の外に出たことがない。ベッドのシーツと着替えは夫が替えに来る。食事も彼が持つて来たものだけを口にする。湯船につかったことも、シャワーを浴びたこともない。濡れたタオルで体を拭き取るだけ。

ここですることは単純だ。食べる。寝る。まぐわう。孕む。生む。その繰り返し。外の情報は入ってこない。

世間で何が起こっているのかは知らない。何が起こっていたのかも忘れてしまった。曜日感覚はおろか、今が何年何月何日なのかも認識できない。自分の年齢さえ、もはや把握できていなかった。

時々、思う。

私は子を産むためだけの機械なのだ、と。

事実、そうなのだろう。

それ以外のことを、この身は忘れてしまったのだから。

自分という存在が分からなくなる。

牢獄に閉じ込められた囚人？ ケージに押し込められた家畜？ あるいは、巨大な機械の歯車の一つ？ どれでもいい。どれも、きつと同じだ。思考を停止させないと存在できない。自我を持った瞬間、壊れてしまう。そういつた存在なのだ。

だから、私はもうじき壊れる。与えられた役割をこなす自信が、もう残されていない。心の寿命が迫っている。近いうちに、自分で終わらせることだろう。

そんな私にも望んでいるものがある。たった一つだけ、欲しいと願うものが。愛。

与えられる側でも、与える側でも、どちらでもいい。

愛さえ。それさえあれば、生きている実感が出てくるはずだ。

私の子供はどこ？ あれだけ産んだのだ。一人くらい、私の傍にいてくれてもいいではないか。

私は祈る。毎日、祈っている。その行為だけが唯一、人間らしいと思う。

ください。私に子供をください。私から離れない、愛すべき子を。

祈りの効果は変わらない。効き目など、確かめようもなかった。それでも、心が壊れるまではやらなくてはならない。漠然とそう思っていた。

ふと、右手に熱を感じた。見れば、不思議な紋様が右手の甲に浮かび上がっていた。

普段の生活では感じることもない温かさだった。怖くはない。むしろ、急に現れた『特別』なことに心が躍ったくらいだ。

私は祈る。心を込めて祈る。強く、強く、強く、祈る。

右手がさらに熱くなった。動悸が激しくなってきた。それでも構わず祈り続ける。

神様、私に――

突如、目の前が真っ白に染まった。

強い光。その奥に、人影があった。

「うっおおおおおー！」



視界が晴れる。私の目の前には、巨大な男がいた。この狭い部屋ではまともに立って  
いられないくらいに大きい。

白い髪。腰ほどまで伸びきった髪。手入れなど全くされていらないように見える。上半身は裸で、下半身に赤い布を巻いているだけだ。腕やお腹に重そうな金属製の装飾がつけられていた。ジャリ、と金属が擦れ合う音が部屋に響く。よく見れば、足の付け根にも金属性の輪っかがついていてる。そこから鎖が伸び、先端には鉄球があった。

ふいに、巨大な男が私の顔を覗き込んだ。

赤い瞳が私を見つめている。

「ぼく、の……ます、たあ？」

たどたどしい言葉遣い。

変わった目の色だが、よく見れば愛らしい形をしていた。

本能的に感じるものがあつた。

私はこの子を守り、育てなくてはならない。

「あなた、お名前は？」

「あ、あすてりおす……」

「アステリオス。素敵なお名前ね」

彼は表情を明るくさせた。

この子はとても素直に笑う。

大きい体をしているが、心はきつと純粹な子供なのだろう。

わかる。私にはわかる。理解できる。でなければ、これほどまでに母性を感じることはないはずだから。

祈りが届いた。この奇蹟を噛みしめる。

「ああ、ありがとう神様」

「かみ、さま……？」

「なんでもないわ、私の……愛しい子……アステリオス」

私は彼の頭を抱き寄せた。

アステリオスは抵抗しない。むしろ、心地よさそうに身を委ねてくれた。

人生で一番、幸せな時が訪れた。

そう思ったことが、私への救いだったのかもしれない。

## アサシン 暗躍

「あははは！ 笑いが止まらんね！」

痩せぎすの男が嗤う。黒いスーツに身を包み、髪型はオールバック。身だしなみは清潔そうに整えているように見えた。だが、目のくまやこけた頬などの見た目ゆえに不健康そうなイメージが残った。

男の目の前には、数十のモニターが並んでいた。廊下や出入り口、各部屋。至る所に監視カメラを設置し、映像を記録しているのだろう。

「あの女は逸材だ！ 良妻とでも言うべきか！ 触媒も祭壇も、詠唱すらもなしで英霊の召喚に成功した！ やはり優秀な素材だった！ いや、僕がそう仕立て上げた！ 素晴らしい日だ！」

数あるモニターの中に一つだけ、人が映っているものがあつた。

妙齢の女性と巨大な男が、狭い部屋で抱き合っていた。

「召喚されたサーヴァントと、そのマスターの映像。これで商品の価値は確定した。良い！ 実に良い日だ！ 四月十八日、土曜日。二十一時ちょうど、か。今日、この時間を、結婚記念日とやらの設定してやってもいいだろう！ それほどまでに素晴らしい日

なのだから！ あははは！」

彼の言う商品とは、モニターに映し出されたサーヴァントではない。ましてや、そのマスターたる彼の妻というわけでもない。では、彼らが今まで作った子供が商品か？ それも厳密には違う。

商品とは、彼の体液のことだ。

初めは魔力の補給に優れた代物、という程度のもだった。しかし、自分自身を改良し続けてきた結果、彼の体液を取り入れた者は後天的に魔術回路を増せる、という効能が追加されていた。

その証拠がバーサーカーを召喚した彼の妻と、長い年月をかけて培ったデータだ。

これは驚くべき成果だった。彼自身、予想もしていなかった。

魔術回路の質と量は生まれた時に決まる。さらに言えば、生まれた家柄によっても左右される。歴史が長い家系ほど、魔術回路の質と量は向上する傾向にあった。魔術師の才能は受け継がれていく。必ずしも成功するとは限らないが、それでも魔術師は代を重ねることでその素質を伸ばそうと必死になるものだった。

だが、彼の体液はそれらを否定する。才無き者に、才を後付けする。魔術師にとって喉から手が出るほど欲する手段を、彼は偶然にも完成させたのだ。

妻の食事に微量の体液を混ぜた。妻の蜜壺には己が精を注ぎ続けた。妻が産んだ子

は全て売り飛ばした。

彼にとつて赤ん坊は金のなる木だった。欲していた者たちは様々だった。単純に子に恵まれない魔術師の家系もいた。実験材料として求めた者もいた。性欲を満たすための者もいただろうし、臓器が目当ての者もいたことだろう。

しかし彼にとつて、売り払った子供の将来などどうでもいいことだった。買い取った者が好きにすればそれで良し。むしろ重要なのは買値のほうだ。

彼は今後の人生プランに思いを馳せる。

何をどの値段で売りつけて、施設をどのように改築していくか。新しい女を連れてくるのもいいかもしれない。一人か、二人か。それとももつとか？

——ああ、手が足りない。これから忙しくなりそうだ。

「マスター」

声が響いた。姿は見えない。声色は男か女かも区別がつかない、中性的な声だった。

だが、マスターと呼ばれた彼は動じない。

「アサシン、何かあったのか？」

「サーヴァントが一体、こちらに近づいております」

ほう、と彼の口が動いた。

「もう来たのか。早いな。しかし、所詮は単騎。ならばこちらも予定通り、すぐに対処し

よう。我が迷宮に招き入れたまえ」

「承知」

バーサーカーのいる部屋には盗聴器が仕掛けられている。会話の内容を聞き取っていたアサシンのマスターは、真名を聞いていた。どのような英霊なのかも知り得た。

彼の頭の中ではいくつもの策が練られている。

「さて、地の利がある上に、二対一だ。たとえば、セイバー、アーチャー、ランサーの三騎士であつたとしても、負ける気がしないなあ。あはははは！」

己の勝利を疑っていない。しかしながら、そこに油断や過信は一切ない。

男は笑う。

さらなる想定外が待ち受けているとも知らずに。

## キヤスター 召喚

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。それとともに、七次ななつき 溻みおは大きな伸びをした。  
た。

彼女は春風のように爽やかに温かみのある笑顔を浮かべて、呟いた。

「はー……今日もつまんなかったー」

迂闊が過ぎるその一言は、教師からの怒りを買った。小言で時間を費やしたせいで、クラスメイトからもささやかな怒りを買った。ホームルームのあとに掃除当番を買ってでることで事なきを得た。

「これは最悪の一日だね」

掃除を終えると、今度はそう呟いた。

彼女はとにかく不満で退屈だった。その原因は、パウラ・シユペーアの欠席にある。溻の友人の数は多い。クラスメイトどころか、同学年の大半とは良好な関係だ。

マイペースな八方美人。少しお調子者な面があり、気さくに誰とでも話せて、どこか憎めない存在。それゆえに、彼女はだれからも嫌われる理由のない人物だが、格別に人氣のある人物というわけではない。交友関係が広くて浅い、ごく普通の子だ。

そんな滯りにとって特別な存在が一人だけいる。パウラ・シュペーアだ。彼女とは中学の時に知り合った。特別な出会いとは言えない。何気ない会話がキツカケで、一方的に仲良くなった。それからは親友として振る舞っている。パウラへの信頼や友愛が一方通行であつたとしても、それでよし。ほんの一瞬でもパウラが笑顔になつてくれさえすれば、それでよし、なのだった。

滯りは片付けと帰り支度を済ませると足早に昇降口に向かった。

階段を軽快に降りて行く。一階に降り立つと、視界の端にノロノロと歩く一人の教師を捉えた。

「あー！ しば先生ー！」

あだ名で呼ばれた神々廻誠は立ち止まると、ゆっくり振り返つた。

「こら、七次。『しば』じゃなくて、『ししば』だろ？」

「略してシバセンでしょ？ 知ってる知ってる」

「まったく……なんだって皆、たつた一文字だけを略すんだらうな……」

誠は困つたように頭を掻いた。滯りは彼の元へパタパタと駆け寄る。

「しば先生、今日は一回も見かけてなかったけど何してたの？ ホームルームにもいなかったし。てか、顔色悪いね？」

「……まあ、色々あつてな……簡単に言えば、その……えおう……」



「ん？　なんて？」

「……寝坊です」

「えー、寝坊したのー？　先生、正直なのは良いことだけど、あんまり生徒にそういう情報を与えちゃダメだよ？　他の先生たちの面子が台無しになって先生としての威厳がなくなっちゃうんだから、気を付けたほうがいーよー？」

「ご、ごもつともです……」

痛いところを突かれたのか、誠はさらに顔を悪くさせた。一応、反省しているようだった。

「そうだ、しば先生！　パウラちゃんのこと、なにか知らない？」

「シユペーアか……そういえば、最近は休んでたな……いや、すまん。俺もさつき来たばかりで把握してないんだ」

「もー、副担のくせにー！　職務怠慢だー！　しば先生、さようならー！」

誠の返事を待たずに濡は昇降口の方へと駆けだす。

だがしかし、ほんの数メートル先でピタツと立ち止まった。クルリと体を反転させる。

「せんせー！　理由はわかんないけど、帰りにバナナを買うといーよー！　きつと運気が上がるよ！　じゃ、さよならー」

滯は一方的にそう告げてから、再び駆けだした。

校舎から出ると、いつもの通学路とは違う道を辿る。向かう先はパウラのアパートだった。

彼女のことを気がかりだった。とにかく嫌な予感がする。昨日、パウラの顔を見た瞬間から胸騒ぎがしていた。いつも通りに明るく振る舞うことで気のせいだと思い込もうとした。

しかし、滯の勘はよく当たる。外す方が難しいくらいに怖いほど当ててしまう。

玄関先で話している際、いつもと違った雰囲気を感じてはいた。形容しがたい不安それをパウラから聞き出したかったが、その時は言葉が見つからなかった。結局、パウラに押し返される形であっさり引いてしまった。パウラの放つ言葉の端々に、普段とは異なる凄味が混じっていることもあって、食いつくことができなかった。

ただ、去り際にパウラが「またね」という言葉を口にくれた時、これ以上ないほど安堵した。おそらくそれが、その時の滯にとって一番『欲しい言葉』だったのだ。またパウラの声を聞きたい。その一心で滯は彼女が住むアパートまでやってきた。階段をのぼり切り、ドアの前に立った。

チャイムを鳴らす。反応はない。

「おい、パウラちゃん」

声をかける。やはり反応はない。漣は確信した。今、パウラが部屋にいないことを。「あ、鍵かかってない……」

漣自身も気付かぬうちにドアノブを回していた。玄関で靴を脱ぐと、そのまま上がってしまった。電気のスイッチを押す。物で散らかった室内が照らされた。見慣れた光景だ。どこにどんな物があるのかは、ほとんど把握している。

寝室へと足を踏み入れた時、初めて違和感を覚えた。直感を頼りに顔を左へと向ける。

見覚えのない服が壁にかかっていた。

白くてゆつたりとした長袖の衣服。ワンピースのようにも見える形をしており、少々くたびれていた。パウラが着るには一回りほど大きいように見えた。古びた異国の衣装、という印象が頭から離れない。

漣は衣服へと手を伸ばし、触れた。

途端に目頭が熱くなった。鼻の奥がツンとする。感情が徐々に昂ってゆく。

「あれ？　なんでだろ？　涙、止まんない、よお……」

漣は衣装を抱き寄せた。足の力が急に抜けてしまい、膝が床へと落ちる。そのまま漣は泣き崩れてしまっていた。

どうして、こんなにも悲しいの？　漣は抑えのきかない悲しみに困惑するばかりだつ

た。理由を知りたい。理由が欲しい。この涙が流れる先を、漣は求めた。それほどまでに理不尽な悲哀だと、漣は思った。まるでこの先で味わう悲しみが一気に押し寄せて来たかのような、理不尽さだと。

不意に、漣は背後で物音が聞こえたような気がした。そつと振り向く。

「誰？　パウラちゃん……？」

人影は見えない。だが、そう声をかけたくなつた。不安だつたのだ。

しばらく沈黙が続いた。漣は何もない空間を見続けていた。

「俺の気配に気付いたのか。それとも、ただの勘によるものか……」

声が返ってきた。男の声だ。漣の鼓動が早まる。冷や汗が背中を伝っていく。

「貴様は誰だ？　この部屋の主ではあるまい？　偶然、居合わせてしまっただけの者か

？　ならば、そうだな」

男に返答することも、質問することもできなかった。いや、姿も見えない男が、それをさせないだけの圧力を放っていたのだ。漣は一言も発せないどころか、呼吸すら忘れるほどに圧倒されていた。

声の主が唐突に漣の前へと姿を現す。緑がかつた黒のマントとシルクハット。礼装服を着こなしした男の姿だ。整った顔立ちに感情は見られない。長めの白髪から覗く双眸に、恐怖を植え付けられた。

「俺との遭逢を恨め。己の不幸を呪え。貴様の宿業を悔め」

男が腕を振り上げた。黒い炎が手を包む。

振り降ろされれば死ぬ。それを理解することだけが、この瞬間の溼に許された。体は震えあがり、抵抗する素振りすら見せられない。あまりに無力。ただ屠殺される時を大人しく待つ、家畜のように。

溼は悟っていた。自分は何にもできない。状況を覆せるような奇蹟も持ち合わせていない。

だがそれでも、誰かがなんとかしてくるような、奇妙な予感だけはあった。

黒い炎が振り降ろされた。命を絶つ一撃。溼は自分の身に降りかかる脅威を認識できていなかった。その一撃をまともに受けていれば、死んだことにすら気付かなかったことだろう。

しかし、それは標的に当たることはなかった。熱が床と壁を焦がした。

男の表情が強張る。瞳の虹彩に驚きの色がたしかに加わった。

「なに……う？」

白髪の男は振り返る。

一メートルほどの距離を置いて、黒いフード付きのローブを羽織った青年が立っていた。溼を小脇に抱えている。対峙する二人の男の身長はそう変わらない。視線が交わ

ると、ローブの男の表情が緩んだ。

「その黒い炎、怖いね。魔力によるものなんだろうけど、色々と混ざっている感じがするなあ。君のクラスは何かな？ 武器を携帯していないのは室内だからかな？ それとも、武器を用いるほどの相手ではなかったから？ もしや、いつも素手で戦ってるのかい？ 私の推測では暗殺者だと思っただけど、どうかな？ とりあえず、アサシンと呼んでもいいかい？」

ローブの青年には緊張感がまるでない。世間話でもするかのように、気楽に話しかけていた。対して、アサシンと呼ばれた白髪紳士は身構えている。警戒しているのだ。「……貴様は何者だ？」

自らのクラスへの指摘に、肯定も否定もせずにアサシンは問うた。

「サーヴァント、キヤスターさ。おそらくは、この子が私のマスターだね」

キヤスターと名乗ったローブの男は敵対する相手から目を逸らし、右脇に抱えている濡へと視線を向けた。濡は顔を涙でぐしゃぐしゃにしたまま、ポカンと口を開けているみだった。

黒い炎が揺らいだ。アサシンが今、動かんとした、その時だった。

「おっと、待ってくれ。始まる前に言っておくことがある」

左の手の平を見せつけるように、キヤスターが制した。

「私は肉弾戦が苦手だ。かと言って、知略を巡らせた戦術もそんなに好きではない。魔術を極めたというわけではないし、特別な魔術の才を持っているわけでもない。強い宝具もこれと言ってないなあ。好きなものは勉強というか、読書だね。異文化交流には特に興味を持っているよ。君はどこの生まれかな？ ああ、真名がバレない程度で構わないよ？ 真名を教え合うのは、もっと仲良くなってからでも遅くはないさ。ちなみに、私の生まれはイスラム圏内だからね。それと……」

「……待て」

「うん？ なんだい？」

少し嬉しそうにキャスターは返事をした。

アサシンは面倒そうに、かつ、呆れた様子で言葉を繋げる。

「貴様は何をしたい？」

「自己紹介さ」

「何のために？」

「……お互い、やることは理解しているはずだ。これは聖杯戦争。異なる願いを持っている以上、必ず殺し合いが起きる。敗者が生まれる。勝者は限られている。そういうで、私はあえて、こう言おう」

キャスターは左手を差し伸べた。

彼は握手を求めて、告げる。

「友達になるう？ 同盟ではない。対等な立場。気の置けない関係。完全なる友好だ。この聖杯戦争を私と共に、勝利者のみで終わらせよう」

そこに害意はない。裏も表もなく、心に思ったことをそのまま述べている。誠実なまでに、キャスターは友を求めているのだ。

黒い炎が空間を引き裂いた。寸でのところでキャスターは回避する。しかし、その動きを読んでいたかのようにアサシンは追撃を行った。黒炎を纏った右手がキャスターに迫る。

硬質な音が響いた。

「硬いね。まるで鋼だ」

キャスターはぼやくように言った。彼の左手には、いつのまにかダガーが握られている。刃渡りはおよそ三十センチ。なんの変哲もない武器だ。それでアサシンの拳を受け止めていた。

さほど驚きも見せず、アサシンは冷徹な目を向けたままだ。追撃の拳を繰り出す。キャスターはそれに合わせて刃を重ねる。一瞬の内です十を超える攻防が行われた。常人では視認すら不可能な領域だ。

「武術や技術ではなく、単純な膂力による攻撃。特殊な魔力の投射。この黒炎は毒と呼



ぶべきかな？」

高速で行われる戦闘の中で、キャスターは分析したことを口にする。アサシンからの反応はない。構わずに攻撃を続けている。

「まいったな」

劣勢なのはキャスターだ。毒炎によるダメージが徐々に増えている。アサシンの猛攻は左腕一本で抑え切れるものではない。無抵抗なマスターを庇いながらでは尚のこと不利だ。ただし、それだけが原因ではない。

キャスターの能力そのものが、アサシンに劣っていたのだ。

「私が君に勝てる要素が見当たらないね」

ニコリと爽やかな笑顔をキャスターは見せた。

慈悲なき拳がキャスターの腹部を貫く。悲鳴も苦悶の声も漏らさず、キャスターの体はマスターである滯ごと霧散した。

さすがのアサシンも驚きを隠せずにいた。

「幻覚……？ いや、手応えは本物だった……ならば、実体を伴った分身か……？ しかし、いつ本物と偽物で別れた？」

アサシンはぐるりと周囲を見渡した。周辺にサーヴァントの気配は一切感じない。それどころか、逃走した痕跡はまるで見当たらない。鮮やかなまでの撤退。まるで、ア

サシンのクラスと疑うほどに。

室内は静穏に包まれた。アサシンはひとしきり佇んだあと、もうこの場には用がないのか消えるようにして立ち去った。

黒炎で焦がされた部屋。闘いの痕跡だけが、この場に取り残された。

## キヤスター 召喚2

※

ローブを羽織った青年——キヤスターは夜の住宅街を駆けていた。

両手で濡を抱え、音もなく走る。パウラの家から、既に数キロは離れた地点だ。

「うん、そろそろ撒けたかな？ いつまでもこの格好のままでは、マスターに失礼だからね」

徐々に速度を落としいき、止まると濡を地面に立たせた。

濡はフラフラと、おぼつかない足取りだ。キヤスターはそつと肩を支えてあげる。

「あの、えっと、ありがとうございませ……」

動揺したまま濡はお礼を言った。

キヤスターはフードを取った。浅黒い肌と黒髪が外気に触れる。彼は濡に向けて、優しく微笑んだ。

「さてと、マスター。いくつか聞きたいことがあるんだ。とりあえず、あの場から逃げ出してしまったけれど、良かったのかな？ あそこは君にとって、どういう場所だったん

「だいたい？」

「えと、友達の家です……」

「ほう。友人の住まいか。いかにして、あのように奇妙で珍奇で危機的な状況に陥ったのか。友に留守番を頼まれていた最中に襲われたのかい？それとも、たまたま用事があつただけで留守だったから勝手に部屋へと上がったところを襲われた、かな？これは興味深いね。もっと詳しい話を知りたいな。特に、君の友人とやらについて詳しくね」

「詳しい話って言われてもなあ……って、ああっ！」

澤はパウラの部屋にあつた服を抱きしめたままだったことに気付いた。力強く抱きしめていたので、皺だらけだ。彼女の顔は見る見るうちに青くなっていく。

「どうしよう！ 勝手に持ってきたら！ 返さなきゃ！」

「うーん、今すぐ戻るのには得策ではないね。後日、安全を確保した上で、理由を添えて返すのがいいだろう。まあ、物が物だから、理由も考えないとね」

「えー……でもお……」

「まあまあ、落ち着いて。とりあえず、ゆっくりできる場所へ行こう。君の拠点に案内して貰えないかな？」

「きよてん……？」

「君の帰る所。安心できる場所さ」

「え、え、私の家に来るってことですか？」

「そうだよ。もちろんだとも。私は君のサーヴァントだからね。四六時中、君の傍にいらよ」

妙な空白が生まれた。

滯が少し困惑気味に首を傾げると、キャスターもつられて首を傾げた。

「あの、さーぼんとつて、なんですか？」

「ふむ……………？ ああ、もしかして、そうか。なるほど。そういうこともあるのかな？」

キャスターだけが納得したように独りごと。

「君、一般人だね？ 魔術って知ってるかな？」

「魔術って、あの……………ハンドパワーというか、手品というか、マジックみたいな？」

「うんうん、なるほど。まず、そこから説明していくべきだね。例えば、そうだ。視覚的に分かり易い例だと、こんな感じだよ」

すると瞬く間に、キャスターが二人になった。

滯はポカンと口を開けながら、ペタペタと二人のキャスターに触れる。どちらも実体があるため、幻ではない。たしかに二人のキャスターが存在しているのだ。

「私なりの理想分身ザバーニーヤさ。完全かつ理想的な分身を生み出すんだ。ちなみに、先ほどはこれで逃げ延びたんだよ」

二人のキヤスターは同時に喋った。どちらに視線を合わせたらいいか分からない。溻は、キヨロキヨロと交互に見ている。

「ぎ、ぎばー?」

「これは厳密には魔術じゃないんだけど、まあ、こういう奇跡と呼べるようなことを人為的に引き起こす手段のことを魔術って呼ぶのさ」

キヤスターが指を鳴らすと、分身は消滅した。

「あ、消えた」

「さてさて、細かなことは歩きながら説明しようか? 一旦、君の家へ戻ろう」

「え、いやー、その、助けてくれた人にこういうのもアレですけど……どうしても私の家に行くつもりですか……?」

「それについても歩きながら事情を説明しよう。その様子だと、右の手の甲にある令呪もわかってないんだろう?」

「手の甲?」

溻は手の甲を見る。そこには炎を象つたような文様が描かれていた。

「なにこれ!? 入れ墨!? え? いつのまに!」

「ほらね？ 話すことは山ほどありそうだ。だけど、その前にすべきことがあるね。私としたことが一番大事なことを忘れていたよ」

「大事なこと？」

「自己紹介さ」

優しさに満ちた笑顔とともに、キャスターが右手を差し伸べる。

滯はぼんやりと、その顔を眺めながら握手をした。

「マスター。君の名前は？」

「七次滯です」

「ナナツギ、ミオ。良い響きだね。特にミオという言葉を口にする、軽やかな気分になる。素敵な名前だ。ミオと呼んでいいかい？ いや、呼びたい。そう呼ぶでしょう。決まりだね。それでは、私のことはキャスターとでも呼んでくれたまえ」

「……キャスター？」

「もし呼びにくいのであれば、そうだな……スルタン、と呼んでもらおうかな？」

「スルタン？ え？ どっちが名前でどっちが名字？」

「どっちも名前とかではないよ？ 両方とも、肩書きや称号といった代物だ」

「へ？ 本名は？」

「うーん……まだ教えられないかな」

「どうして?」

「だって君に真名を伝えたら、うっかり言ってしまうかもしれないからね。用心深さ云々を語る以前に、君は開けっ広げというか、開放的な性格をしていそうだからね。よつて、真名は然るべき時に教えるさ」

「しんめー? つか、なんか馬鹿にされたような気がするんですけど?」

ムツとした表情を滲は作つた。キャスターは落ち着き払つた笑みを向ける。

「なに、軽口を叩いただけさ。もし、私が君の気分を悪くするようなことを言つてしまったのであれば、素直に謝るよ。でもそれは、おそらく気のせいだよ、気のせい。だつてほら、この短い時間で君は非常識な事象を浴びるように体験したのだから。頭の中の整理が追いつかなくて混乱しているのさ。感情が乱れてしまつても、それは仕方のないことだよ」

「んー……? なるほど? そうなのかなあ……?」

「そうそう。そんなことよりも、私は君のことをもつと知りたい。マスターである君をよく理解し、互いに信頼し合えるような間柄になりたいんだ。なにせ、今の私はこの世界に一人ぼっちだと言つても過言ではない。ゆえに私は、そう。私は——友達が欲しいんだ」

キャスターの瞳はとても澄んでいた。滲は彼の瞳の奥を覗き込むように、ジツと見つ



める。

この瞳を、どこかで見たような気がする。懐かしい気がする。私はこの瞳を信じられる気がする。信じていた、気がする。

全てが憶測だ。ただの勘だ。彼の言葉が全て信用できるといふ保証などない。

しかし、それでも滯は——

「まだまだ全然、まったくもって、これっぽっちも、状況をよく分かってないけど……と  
りあえず、あなたとは気の合う友達になれる予感がする！ 私なんかで良ければ友達に  
なるよ。改めて、よろしくね、キャスター」

滯はニカリと歯を見せて笑う。

その瞬間、ほんの一瞬だけ。視認するのも難しいほどの一刹那。キャスターは動揺の色を瞳に宿した。キャスターにとって、それはあまり見られたくない虹彩だった。どんな理由であれ、ほんのわずかでも不安を与えるような要素をマスターに見せたくなかったのだ。

しかしながら。キャスターのそんな思いとは裏腹に、滯はまるで気付いていない。あ  
どけない笑顔を向けたままだ。

キャスターは左手で頭を掻きながら、クスリと笑う。

「不思議な子だね、君は」

「それ、よく言われる！　なんでだろう？」

二人は手を離すと、会話をしながら歩き出していた。

すでに打ち解けている雰囲気が出来ていた。

「うーん……神秘的、というような意味合いで言われているわけではないだろうね。君の場合は、そうだな……『気が付いたら友達になっていて、どうして友達になったのか。そのキツカケがサツパリわからない不思議な子』とか、『時々、理解を超える言動がある不思議な子』という評価だろうね。私の場合は、『勘の鋭さと本人の認識にズレが生まれている不思議な子』という意味合いかな？」

「ねえ、なんかやつぱりバカにしてない？　してるよね？　絶対、してるでしょ？」

「してないさ。この短い時間に私は本気で、真剣に、真面目に君の人となりを分析したからね。たしかに、サンプルが足りないという点は否めない。不正確な部分が多いかもしれない。私の見当ちがいもあるかもしれない。だが私は、君の想像をはるかに超える多くの人々を、この目で見た。耳で聞いた。肌で感じてきた。それらの経験の元、より正確な分析結果を生み出しているんだ。どうだい？　納得できたかな？」

「……いや、あやしい。なんか言葉をいっぱい並べて誤魔化してる気がしてきた」

「ほら、やつぱり勘が鋭い。素晴らしい才能だ」

「え、そ、そうかな……？　そんなことは……ん？　ちょっと待つて。ということとは、

やっぱり——」

「さて、それではまず、『聖杯戦争』について語るとしようか」

「待つて待つて、その前に決着を付けるべき話題があるでしょ？」

「いいかい？ 聖杯戦争を簡単に説明すると、七組の陣営によるバトルロワイヤルなんだ。勝利できるのはたったの一組だけ。そして勝利した暁には、なんと——」

「ちよつと、聞いてよー！ こんなモヤモヤした状態で話なんてできないよー！」

滯は心の底から怒っているわけではない。多少の憤りはあるが、キャスターの言葉の半分は冗談として受け取っている。キャスターに関しても同じだ。少しからかっているだけで、滯を見下しているわけではない。

キャスターと滯のやりとりはまさに、『対等な立場の友人同士』が行うソレだ。二人はこの聖杯戦争において、早くも信頼関係を勝ち取ったのだ。

滯の家へと向かって二人は歩く。

いずれ訪れる別れ。それに伴う悲しみ。それを知っていながら、微塵も感じさせない。軽やかで楽しげな足取りだった。

## セイバー 情報

「せんせー！ 理由はわかんないけど、帰りにバナナを買うといーよー！ きつと運気が上がるよー！ じゃ、さよならー」

濡の走る姿を見送った神々廻誠は、深いため息を吐いた。

「なんでバナナ……？」

(……マスターは生徒に慕われているようだな)

ラーマの声が頭に響いてきた。ハツとした誠は背筋を伸ばしてあらたまる。

「これは慕われていると言うんですかね……？」

(少なくとも余は慕われていると感じたぞ？ さきほどの子は自然体で話していた。警戒心や敵愾心のようなものがないということだ。ある程度の信頼関係を築いていなければ、こうはならないだろう)

ただ単に、舐められているだけなのでは？ 警戒するほどの相手ではない、ということでは？

そういった言葉はなんとか飲み下した。

「……まあ、さっきの子は——七次は、ちよつと変わった子ですからね。それはそうと、今朝の話の続きをしましょうか」

(忙しそうに見えるが、よいのか?)

(こうして念話もできることですし、歩きながらでしたら少しは。今日のところは、頭を使うような仕事は残っていませんからね)

とは言いつつも、誠にはやるべきことと考えるべきことが山ほどあった。聖杯戦争のことはもちろん、破損した家のことや仕事のこと。頭の痛くなる現実を直視したくなかったただけだ。

職員室へと向かうべく、廊下を歩み進んだ。

(そうか。ならば、遠慮なく聞かせて貰おう。マスターは魔術師ではないと言ったな? 聖杯戦争についての知識はどれだけあるのだ?)

(おそらく、最低限の知識は持っているかと……最終目標も知っています)

(うむ、なるほど。では聞こう。この聖杯戦争をどうやって勝ち抜くつもりだ? 戦略や策はどんなものを用意している?)

(あー……戦略ですか……策ですか……)

(生半可な気持ちで聖杯戦争を勝ち抜いていくことは難しい。むしろ、死を伴う脱落すら考えられる)

死を伴う、という言葉に背筋が凍る思いをした。聖杯戦争というのは殺し合いすら行われる儀式。そういう認識と知識は持っていたが、実感は湧かなかった。ラーマの力あ

る言葉によつて、初めて意識することが出来たのだ。

(いや、その。正直に申しあげて、なにも考えていません……戦うための用意もありません……というより、その、サーヴァントの召喚は勢いでやってしまつて……)

(ほう、勢いか。聖杯戦争の恐ろしさを知りながらも、後先を考えずにサーヴァントの召喚を行ったのか。それだけ叶えたい願ひがある、ということだな?)

誠の足がピタリと止まつた。

願ひ。

誠は考える。僕が聖杯に望む願ひとは、なんなのか?

(……僕の場合、願ひというよりは……あなたを……ラーマーヤナの主役たる、ラーマ王を召喚したかっただけかもしれません)

(余を召喚したかった、だけ? どういうことだ?)

(僕はあなたに直接聞きたかっただけなんです。あなたが愛する女性を救おうとした時、どんな気持ちだったのかを。それを知りたかつたんです)

誠はラーマが即座に答えてくれるだろうと予想していた。現代に伝わるラーマーヤナの物語通りであるのなら、誠が欲する言葉を与えてくれると信じていた。

しかし、いくら待つてもラーマからの返事がない。誠は不安になつた。

(あの、ラーマ様?)

(……ああ、すまない。うかつにも、少し想いを馳せていた。あの頃の余の想いは、一言では言いあらわせなくてな。語れば長くなりそうだ)

(そ、そうですね……それなら、家に帰った時にでも、ゆっくり聞かせて貰えればと思います)

(うむ。それが良いだろう)

(すっかり話が脱線してしまいましたね。ええっと、聖杯戦争の話でしたよね)

誠が聖杯戦争について考えようとした時、不意に「おーい、誠くんー」と、自分を呼ぶ声が届いた。

油断していた誠は、心臓が飛び出るんではないかと思うほど驚いた。

(すみません、ラーマ様。また後ほど……！)

(うむ、余はかまわないぞ)

慌てて声の方向を見ると、宮崎ローランドが手を振りながら向かって来ていた。

「ローランド先生！ 部外者が勝手に入ったらダメですよ」

「ちゃんと許可は取ってるよ」

受付を訪ねたのだろう。来客者であることを示す名札をピラピラと見せつけた。

「ローランド先生がアポなしで来るなんて珍しいですね。初めてのとき以来じゃないですか？」

「いやー、アポを取るのちよつと失念しちゃつてたよ。面白そうなネタがあつてね。早く誰かと共有したかつたんだ。というより、誠くんに伝えたくつてさ」

「俺に？」

ローランドは口元を緩めた。

「ここ、春戸市の南側には何があるか知っているかい？」

「春戸市の南側？ 梨畑がほとんどでしょう？ 他に何かありましたっけ？」

「うん、その通り。梨畑や田畑とかがほとんどだ。農家が多いね。手を付けていない余った土地もかなりある、という感じかな？ その中に、外国人が住み付いている場所がチラホラあるんだ。彼らはスクラップの売買や中古自動車の修理、販売。故郷の料理の店を開く者もいれば、勤め人もいる。様々な形で生計を立てている。そうそう、外国人の国籍も色々で、ホントに多くの——」

「よく調べてますね。でも、ローランド先生。今日はちよつと、やること多いので……」  
誠は話を切り上げ、立ち去ろうとした。急いでいるように装って脇を通り過ぎたが、すぐさまローランドに回り込まれた。

「おつと、ごめんごめん。つい興奮しちゃつてさ。手短に、手短にね。実は、その外国人の中に魔術師が紛れ込んでいるんだ。そのうちの一人が僕の知り合いでね」

「……それは初耳です」



「言つてなかったっけ？ まあいいや。噂の聖杯戦争の件も、彼らから聞きだした。そして今日、新しい情報を貰ったんだけど……それが面白いことになってきたんだ」

「面白い？」

ローランドは子供のように無邪気な笑顔を作った。

嫌な予感がする。誠は少し身構えた。

「春戸市の南側。梨畑のすぐ横。林に囲まれた、とある一軒家。築三十年を過ぎているそうさ。十年近く前だろうか？ そこに若い夫婦が越してきた。奥さんの姿は引つ越し作業をした時に見かけたのみ。それ以来、外出した姿を見たことがない。旦那は外国人。近隣の住人とは、ほぼ交流がなく——」

「あの……その話、すでに長いんですが……」

「オーケーオーケー。わかっている。要約すると、その怪しい家の住人が聖杯戦争のマスターかもしれないっていう情報を貰ったんだ」

「聖杯戦争の……？」

「理由はいくつもあるんだ。家主である旦那が活発に動き始めたこと。家の周辺で異様な魔力の気配を感知したこと。あとはなんだっけ？ とにかく情報をまとめると、聖杯戦争のマスターである可能性が高い」

「随分と不確かな情報ですね」

「でも、虚言であると断定はできない」

ニヤリとローランドが笑った。心の内側を見透かすような目つきだ。ほとんど反射的に誠は視線を外した。

「……それだけをわざわざ伝えにきたんですか？」

「いやいや、まさか。はい、これ」

ローランドは四つ折りの紙を差し出してきた。誠は思わず受け取ってしまう。

「なんですか、これ？ 住所？」

その瞬間、誠はハツとした。彼が住所を差し出したことの意味に気付いたのだ。

「件の魔術師と思われる夫婦の家の住所だよ」

「いや、こんなもの押しつけないで下さいよ」

「今度、暇な時でいいから一緒に行つてみようよ？ なんだったら、先に一人で様子を見

にいつてもいいよ？」

「肝試しみたいなノリで言わないで下さい」

「それじゃ、用事は以上だから。また今度！」

「ちよつと！ ローランド先生！」

ローランドは手を振りつつ、にこやかに去つていった。誠は特に追いかけてもせず、呆れ気味にため息を吐いた。

(どうやら、今後の方針は定まったな。その魔術師とやらの工房に出向くでしょう)

(真偽も定かではないですけど……)

(外れなら仕方なし。当たりならそれでよし。仮に罠だったとしても、突破すれば良いだけのことだ)

ラーマの言葉からは自信が溢れていた。情報の真偽を確かめるだけでなく、その先の展望まで見通しているのだろう。例えば戦闘になったとしても、勝ち抜く算段もすでに用意しているのかもしれない。誠にそう思わせるだけの力があつたのだ。

(それより気になるのは……先ほどの人物はマスターの友人か?)

(うーん……友人と呼ぶほど深い関係ではないと思いますが……)

(そうか。マスターの交友関係に難癖をつけるつもりはないのだが……さっきの男には用心した方がいい。嫌な気配がした。魔術師とも違う。言い表しようのない、不気味な気配だ)

(嫌な気配、ですか……?)

(ほとんど直感だよりなのだがな。不快にさせてしまったのなら、すまない。しかし、これは余の……マスターの身を案じるサーヴァントとしての、重要な忠告だと受け取って欲しい)

重みのある口調でラーマは言い切った。

ローランドとの付き合いはそれなりにある。変わった人物だとは思ったが、危険な人物だと思ったことはない。しかし、サーヴァントであるラーマの直感も無視はできない。誠は戸惑いながらも、返答をした。

(……わかりました。一応、気を付けてはおきます)

(うむ。そうするといいだろう。ところでマスター)

(はい、なんでしょう?)

(帰りにバナナは買っていくのか?)

「はい?」

思いもよらぬ問いかけに、誠はつい口を出してしまった。

(サーヴァントは基本、食事を摂る必要はない。だが、気分転換や士気向上には繋がる。まあ、気分の問題だから無理して購入する必要は一切ないが……)

とは言いつつ、買って欲しいということが伝わってくる。

良くも悪くも、ラーマの発言には感情が乗りやすいのかもしれない。聡明でありながら純粹さを持ち合わせた人物であると、誠は評価した。

(け、検討しておきます)

(うむ、そうか! よろしく頼むぞ、マスター)

嬉しそうにラーマは言う。話せば話すほど、少年らしさが垣間見えた。もしかする

と、ラーマの精神性は生徒たちと近いのではないだろうか？ と誠は思ってしまった。  
それは、とても口には出せないことだ。胸の奥の方にしまい込み、今日の献立でも考  
える。再び現実逃避を計ったのだった。

## ランサー 潜入

四月二十日。月曜日。二十一時。

ごく一般的な二階建ての一軒家。木々が壁のように囲い、それをさらに石塀が囲う。家の姿を見るには、門の前から覗くしかないだろう。近くに民家は見当たらない。一番近くて百メートルは先だろう。

門の前には道路が横に伸びている。車二台がやっと通れる程度だ。舗装されてはいないものの、それなりに劣化が進んでいた。かなりの年月が経っているのだろう。

道路を挟んだ反対側に電柱がある。防犯灯の真下に、彼女がいた。パウラ・シユペーアだ。

彼女はジツと一軒家を見つめている。思い詰めたような顔つきをしていた。

「パウラよ。いつになったら踏み込むつもりだ」

パウラのすぐ後ろにランサーが出現した。彼女は眉間にしわを寄せて、振り向いた。「この異様な魔力の気配。確実にサーヴァントがここを根城にしている。貴様自身、それなりの下調べをしていたのだろう？ 確信したからこそ、ここまで来たのであろう？

今更、迷う必要はあるまい？」

「迷ってはいません。ただ私は、あなたの心配をしているのです」

「我等<sup>オレ</sup>の心配だと？ よもや、貴様は我等<sup>オレ</sup>の実力を疑っているのではあるまいな？」

怒気を孕んだ声音でランサーは言う。

パウラは気圧されて一歩だけ退いた。顔色は悪くなり、心臓が高鳴る。しかし、なんとか踏みとどまる。彼女にも譲れないものがあつたのだ。

「ランサー、誤解をしないでください。実力ではなく、あなたの気性が心配なんです」  
「気性だと？ それこそ心配することなど、なにも——」

「あなたは今朝、無断でセイバーと交戦しました。それも、私が仮眠している間、勝手に——」

「……興が乗っただけだ」

「相手の陣地内で興に乗られても困るんです！」

やれやれ、とでも言いたげにランサーはそっぽを向き、ため息を吐いた。

パウラは深呼吸をしてから、ランサーに詰め寄る。

「いいですか、ランサー？ 私たちは聖杯の破壊のために、なるだけ多くのサーヴァントと同盟を組まなくてはなりません。仲間と呼べるような存在は期待していません。ですが、協力者は一人でも多く欲しいのです。つまり、私たちがこれからするのは交渉です。決裂した時こそ、あなたの力をお借りしたいのです」

「分かっている。理解している。貴様の方針に背くことはしない。これでよいだろう？」

ランサーは投げ遣りに答えた。これ以上の譲歩はありえない。そう判断したパウラは気持ち落ち着かせた。

「……私の信頼を取り戻してください、ランサー」

「造作ない」

二人は踏み出した。門を通り抜け、家の玄関前までやってきた。なんら異常を感じないことに、パウラはかえって不安を覚えた。

「結界がありませんね……まるで無防備です」

「だが空気は重い。気を抜くな」

ランサーは気付いていた。相手は、すでに戦闘態勢に入っている。

玄関は金属製の引き戸だ。パウラは軽く引いてみる。鍵はかかかっていない。戸はガラリと音を立てて開いた。

家の中へと入る。室内は静寂そのもの。不気味なまでに人の気配がせず、明かりはついていなかった。入ってすぐ右手には階段。奥へとまっすぐ伸びる廊下。左手側にいくつかドアが見える。

「こっちだ。あの部屋に何か気配を感じる」



ランサーが先頭を歩き、奥の部屋へとパウラを導く。

彼女は慎重にドアを押し開ける。

異臭が鼻を突いた。すぐさまハンカチで口と鼻を抑える。さほど効果を感じないが、気持ちの面ではしないよりは良い。我慢するしかなかった。咳き込みながらも室内へと進んでいく。

まず目についたのは数十のモニターだ。壁一面にぎつしりと、規則正しく並んでいる。そのモニターが映し出すのは、どこかの部屋や廊下などだ。いくつかはスノーノイズとなっている。

そして、右側の壁に人影があつた。壁に寄りかかり、足を投げ出す形で座っている。

パウラは左側の壁を手で探った。スイッチを見つけ、部屋の電気をつけた。

改めて、右の壁を見る。

そこにいたのは、人で間違いなかった。正確には人だったモノだ。黒いスーツを着た、人の形をしたモノ。顔に当たる部分は黒く焼けただれて原形をとどめていない。右手首から先は無く、床にはおびただしい量の血痕があつた。

パウラは静かに近づき、死体をよく観察した。

「殺されてから、一日か二日は経っています。服があまり乱れていない……ろくな抵抗もさせて貰えなかったのかもしれませんが。右手が無いのは、もしかしたら……」

「令呪を奪われた、か」

コクリ、とパウラは頷く。

彼女は立ち上がり、モニターの方へと近づいた瞬間、家が揺れた。地震かとパウラは思ったが、すぐに違うと気付かされた。

突如として室内の壁が塗りがえられたのだ。白の壁紙が石壁へ。無垢材のフロアリングは石の床へ。壁にはいくつか燭台が追加された。部屋の構造と家具やモニターはそのままに、材質や装飾が変化したのだ。

「結界か……魔術師の罠か……あるいは……」

壁を見つめるランサーがぼそりと呟いた。

パウラは首を傾げる。ランサーの雰囲気がいとも明らかに異なっていた。覇気は全く感じられず、表情もどこか虚ろだ。

「どうやら閉じ込められたようだな。向こうは戦闘体勢のはずだ」

パウラの方へと向きなおったランサーは、いつもの調子に戻っていた。威厳と威圧を兼ね備えた皇帝の姿だ。

「力を示さなければ、交渉もままならんだろう。さて、どうする？ マスター？」

「……突破するしかありません」

「ふん、その意気を絶やすなよ」

マスターである自分ですら知り得ない何かがあるのだろうか、とパウラは不安になった。しかし、今は目の前の異常事態に対処しなくてはならない。自分にとつては、おそらく最初となるサーヴァントとの交戦。少しの油断、判断ミスが命取りとなるだろう。

感情を捨てる。余計な思考を捨てる。

ふと、滯の顔が思い浮かんだ。なぜかは分からない。もしかしたら、別れの言葉ぐらいはちゃんと残したかったという後悔があつたのかもしれない。

だが、彼女は無情なまでに想い出までも捨て去つた。機械のように淡々と切り捨てた。

残されたのは、色のない表情と冷たい瞳。そして遂行するべき使命。

ここはすでに死地だ。パウラはランサーと共に、行動を開始した。

## キヤスター ー 夢見

同じ顔が並んでいた。

場所は、どこだかわからない。広くて暗い場所だ。ただ、目の前にたくさんの男がいる、ということだけはわかった。

浅黒い肌の端正な顔立ちをした男。まっくろな髪は腰まで届くほど長く、引き締まった体をしていた。上半身は裸だ。ゆったりとしたズボンを履いている。目を瞑っており、ピクリとも動かない。寝ているよう、というよりは死んでいるように見えた。彼らは規則正しく横一列でズラリと立ち並んでいる。まるで、商品をよく見せるために陳列しているかのようだ。

同じ顔の男たちを見定めるように『私』の視界は揺れ動いていた。やがて一番手前の男に『私』の視線は集中し出した。ジッと顔を見つめる。そういえば、どこかで見たような気がする顔つきだった。

ふいに、『私』の視界から手が伸びてきた。自分の右手が相手の肩に触れているようだ。『私』にはそんな意識はこれっぽっちもないというのに。

囁き声が聞こえてきた。うまく聞き取れないが、歌っているかのような響きに少し心

地よさを覚えた。そして、右手が柔らかな光を放ち始めた。光は相手の体に伝わっていき、徐々に全身へと行き渡る。囁き声が途絶えると同時に発光も収まった。

男の目がゆっくりと開かれ、唇が動いた。何か言葉を交わしているようだ。確実に日本語ではない。おそらく、英語でもない。少なくとも、『私』には聞き覚えの無い言語だ。どんなことを話しているのかは分からないまま、男は納得したように頷いた。なんの迷いもなく、スタスタと歩き去っていった。その後ろ姿をひとしきり眺めてから、『私』は真逆の方向に歩き出した。部屋を出て、廊下や階段を進んでいく。しばらくして、寝室と思われる部屋へと辿り着いた。

部屋の片隅に鏡がある。足はそこに向かう。鏡に顔が映り込んだ。

『私』はギョツとした。鏡の中にいる人物が、さきほどまで見ていた男たちと同じ顔の男だったからだ。

感情の见えない、虚ろな表情をしている。疲れ切っているような顔だ。彼の口がゆっくりと動いた。何かを喋っている。しかし、やっぱり言葉の意味はわからない。

ほどなくして、唐突に彼は口を閉じた。うなだれて、目を閉じた。音も途絶えた。

『私』は、ようやく気付いた。これは過去の記憶なのだと。

当然のことながら『私』、七次滞の記憶ではない。

名前も知らない、あの人。教えてくれさえない人。まだ出会ったばかりの、人懐つ

こくて私をコツソリ馬鹿にする、あの人の記憶だ。

常にニコニコ。笑顔とおしゃべりの絶えない、キャスターの記憶だ。

※

むくり、と漣は上半身を起こした。

不意な覚醒だった。だが、まだ頭は起きていない。

変わった夢を見ていた気がする。しかしながら、内容をイマイチ思い出せない。なんとなく、悲しい内容だった気がした。

漣は寝ぼけたまま、ボーツとしている。

ガチャリ、と部屋のドアが開いた。キャスターが中へと入ってくる。

「おや、起きたんだね。おはよう。よく眠れたかな?」

「うん、おはよー……」

キャスターは綺麗に畳まれた制服を漣の脇に置いた。

「ミオ、今日も学校なのだろう? 制服はここだよ」

「うん」

「そうそう、朝食を作っておいたからね。冷めないうちに食べると良い」

「うん、ありがとー……」

滯はパジャマから制服へ、のそのそと着替え始める。

上着を脱いでワイシャツを着た。そしてスカートを手にした時、ガバツと立ち上がる。キャスターは背中を見せて立っていた。

「ちよつと、キャスター！ 勝手に私の部屋へ入らないでよ！」

「ワントンポもツーンテンポも遅いね、ミオ。でも大丈夫。君が見られたくないものは見てないから。ほら、目も瞑っているよ」

「そういう問題じゃないのー！」

滯はキャスターの背中を押して部屋から追い出した。

バタン、と勢いよくドアを閉めた滯は、軽いため息を吐いた。

スタスタとベッドの方へと歩いて行く。

「そういうえば、ミオにちよつと聞きたいことがあったんだ」

ドア越しから声が聞こえた。あえて実体化して声に出しているのは、霊体化して傍にいないことを暗に示すためだ。彼女の信頼を得るためだろう。当の本人はそんなことに全く気付いていないようだったが。

「聞きたいこと？」

「君が寝ている間に、ちよつと調べものをしたんだ」

「調べもの？」

「この街には変わった事件があつたみたいだね？ 数年ほど前に起こつた事件。未解決の事件。それも、猟奇的な事件だ」

滯のスカートをはく手がピタリと止まった。

彼女の表情から、珍しく色が消えた。

「あー……たぶん、わかつたかも」

「知っているのかい？」

「それってアレでしょ？ 若い男女のカップルだけが狙われたつていう……迷宮入り事件」

「そうそう、それだ。どれも惨い事件だったと記録されてる。その事件を私なりに追っていたら、ちよつとしたことに気付いてね。当時のことを覚えているのならば、滯からも少し聞いてみたいと思つたんだ」

「うーん、そうだなあ……」

滯は腕を組んで少しばかり記憶の中を探った。

迷宮入りした事件そのものに対して、思い起こすものは特になかった。

だが――

「あのね、関係あるかどうかは、わからないんだけどさ……」



「どんな些細なことでもいいよ。気にせず話して欲しい」

「……その、最後の迷宮入り事件って呼ばれるのが起きてからしばらくしてね、私の両親が行方不明になっちゃったんだ。関連性があるかは結局わからなくなっちゃった。両親もまだ、見つかってないんだ。まあ、若い男女のカップルじゃないし、たぶん関係ないよね。あははは……」

滯は元氣なく笑った。

代わりに、キャスターから笑みが消え失せた。彼は鋭い眼差しで宙空を見つめていた。

## マスター 神々廻誠（ししばまこと）

「迷宮入り事件？」

ラーマは居間のソファアールに胡坐をかいて座っている。買ってきたばかりのバナナを頬張りながら、誠の話を聞いていた。

「ええ。数年前に、連続殺人事件があつたんです。交際の男女だけが狙われる事件でした。狙われた男女は犯人に弄ばれるように翻弄されて、最後は遺体となつて発見されるんです。それも、詳しくは報道できないほど酷い状態で。当時は春戸アベック連続殺人事件なんて言われてましたよ。結局のところ、犯人は逮捕されず、そのまま未解決事件となりました。この辺の地域では迷宮入り事件って言つたら誰でも思い出すくらいには知名度が高いです。忌まわしい事件なんです。忘れようにも忘れられない。自分の頭の中に、こびりついてしまつていきます」

ラーマの手は止まっていた。

うら悲しい目つきで誠を見ている。

「忘れられない、か……マスターはその事件と、どのような関わりがあつたのだ？」

一瞬、誠は言葉に詰まった。一呼吸してから、ラーマの質問に答える。

「僕は……いえ、僕たちは、その連続殺人事件に巻き込まれたんです。結果的に僕の恋人が、亡くなりました」

ラーマは静かに顔を伏せた。

誠は言葉を繋げる。

「分かつている限り、と言いますか……公表された情報を知る限りでは、僕たちが関わった事件が最後の事件だったんです。それ以降、表立った報道すらありません。捜査も打ち切られたと聞いてます。なにか、事件解決をするキツカケのようなものが出てこない限り、永久に謎のままなんだと思います」

二人は押し黙った。

しばらくの間はそのままだった。が、沈黙を破ったのはラーマだ。

「汝は言ったな。聖杯への願いはない、と」

「はい。分からないんです。僕は、なにを願えばいいのか。なにを願うべきなのか」

「恋人の蘇生は？」

「それは……正直、自信がありません。時が経ちすぎました。僕も変わってしまった。当時の彼女と会っても、あの時と同じように振る舞える自信がないんです」

ラーマは立ち上がった。腕を組み、誠の目を見る。

「……では、犯人の特定はどうだ？」

「犯人の特定も考えました。でも、犯人を特定したからといって、いったい何ができるのか？ これだけの事件を犯した人物です。更生の余地はないでしょう。法で裁くにも、古い事件を立証できるだけの情報が残されているのか。では、犯人に個人的な復讐をするのか？ それで僕が捕まってしまったら本末転倒。僕が犯罪者の仲間入りをするだけですよ。そもそも、そんな気概が僕にあるのか？ 今まで事件から目を逸らすだけで一杯だった僕に、そんな勇氣があるのか？ 甚だ疑問です。犯人を知ったところで、自分を変えられるとは思えないんです」

誠の話聞いてるうちに、ラーマの組んだ腕に力が入っていく。表情が険しくなっていた。どうやら苛立っているようだった。

誠は視線を逸らすことしかできなかった。

「……汝はあれだな！ 余計なことを考えすぎている！ 許せないのならば、許せないと云つて良いのだ！ また会いたいと思うのなら、会いたいと願えばいい！ もつと……そう、もつと自分が正しいと思うことを……自分の気持ちに素直になつて……」

ラーマはその先の言葉を繋げなかった。会話を途中で区切ってしまったため、歯切れの悪さが残ってしまった。

「マスター、今日も仕事なのだろう？ 支度の邪魔をして悪かった。余は少々、頭を冷やしてくるとしよう」

「あの、その……」

「安心してくれ、マスター。余はすぐそばにいる」

彼は誠に背を向けてそう告げると、霊体化して視界から消えた。

誠は選択を迫られていると感じた。

強い願い。

それはきつと、サーヴァントとの信頼関係を築くために必要な要素の一つなのだろう。

自分はどうやってそれを見出せばいいのか。

マスターとして、誠の苦悩が始まった。

## キヤスター 登校

登校中の滯は浮かない顔をしていた。

歩くペースも遅く、上の空だ。周りがまるで見えていない。そのため、何度も電柱や車などにぶつかりかけていた。キヤスターのさりげない誘導がなければ、今頃は事故を引き起こしていたかもしれない。

キヤスターは実体化していたが、一般の人々に姿は見えない。彼への注意を逸らす魔術を行使しているからだ。ゆえに彼は堂々と滯の隣を歩いていった。

「ねえ、キヤスター」

「なんだい、ミオ？」

「一晩寝て、ちよつとずつ頭を整理したんだけど……やっぱりさ、昨日の晩のアレってさ……」

「取り急ぎ、君が最も気にしている心配事は親友……パウラ・シユペーアの身の安否だね？ 昨日のサーヴァントはパウラ・シユペーアの命を狙っていたのだろう。それは間違いないはずだ。でもね……とりあえず、彼女は無事だと思うな」

キヤスターは滯が聞きたいことを先回りするように答えた。

漣はぎゅつと拳を握った。

「……なんで無事だと言えるの?」

「君とは違つて、ちゃんとしたマスターだと予想されるから、かな? 私が召喚されたあの部屋には、既に英霊を召喚した痕跡が残されていた。それなりの覚悟と心得を持つているマスターであるはずだと思つたのさ。どんな英霊を召喚したかまでは知らないけど……私の読みが正しければ、上手くやつていけるだけの力量はあるはずだよ。あくまで私の読み通りなら、ね」

漣は足を止めて俯く。

キャスターもピタリと足を止めた。

「ねえ。パウラちゃん、あのアパートに戻つてくると思う……?」

「戻る確率は極めて低いだろうね。戦闘の痕跡はそのまま。それも自分が不在時に、少なくとも二つの陣営相手に場所を知られてしまった以上、留まる理由がないからなあ……」

漣の体が小刻みに震えた。

顔を覗かなくとも、泣きそうであることがキャスターには容易に予想できた。

彼はほんの数瞬だけ考える素振りを見せたあと、やがて諦めたようにため息を吐いた。

「やれやれ、仕方がない。では、パウラ・シユペーアと再会する可能性を探ってみようか」  
ガバツと漣は勢いよく顔を上げた。表情は明るく、活力が満ち溢れていた。

「そんな方法あるの?」

「……あるよ。彼女の居場所を探る糸口にはなるんじゃないかな? でもまあ、正直なところ、試してみないと分からない。可能性を高めるだけであつて確実に会えるとは限らないし、なによりも危険が伴うだろう。それでもやるかい?」

「うん、やる!」

「即答だね。清々しいまでに」

「で、なにをすればいいの?」

漣は首を傾げて尋ねた。

「簡単なことだよ。ここ一週間のパウラ・シユペーアの足取りを追うだけさ」

「なるほど……なるほど?」

キヤスターはどこからともなく、紙の束を取り出した。

「幸いにも、ここに独自のルートで手に入れたパウラ・シユペーアの行動記録の一部がある」

「行動記録の一部……?」

「その日、どういった行動計画を立てたのか? その日、予定通りに事が進んだのか?」



その日、何があったのか？ それらが詳細に書かれているもの——つまりは日記に近いものだね。ほとんどが焼けてしまったけれど……幸いにも、必要な情報は残されていた」

「ねえ、それドコで手に入れたの？ まさか、パウラちゃんの部屋から勝手に——」

「どうやら……彼女はすでに何人かのマスターやサーヴァントと接触しているようだ。これを使って、まずは話の分かるマスターとサーヴァントに会って情報を得よう。幸いにも、うってつけの人物がここに記されていた」

「ねえ、キヤスター？ 聞いて？」

キヤスターは静かに微笑むと、スタスタと前へ歩き去っていった。

「ほら、ミオ。学校に行こう。このままでは遅刻するよ？」

滯はほんの数秒程度、ぼかーんと口を開けて立ち尽くした。

すぐに我に返り、小走りしてキヤスターに追いつく。

「なんでそうなるの！ 肝心なことは話さないくせに——！」

「まあまあ、ミオ。ところで、話の分かるマスター……その人物の名を聞きたくはないかい？」

「……はいはい。それじゃあ、どんな名前なの？」

キヤスターは不敵な笑みを浮かべた。

「神々廻誠。君の学校の先生だ」

## ランサー 咆哮

四月二十一日。火曜日。十三時。

パウラの呼吸は乱れ切っていた。

足は重い。肺は締め付けられるほどに苦しく。頭は思考することを拒む。空腹を忘れるほどの疲労だ。

敵の陣地内に侵入してからすでに十六時間ほど経過している。パウラたちは石壁に囲まれた室内を延々と彷徨い続けていた。入り組んだ通路は、まさしく迷宮。体力が消耗するばかりだった。

異変が起こった直後。

地下へと続く階段を見つけた。降りた先は、高さと幅が四メートルほどはある通路だ。そこに巨体の漢が待ち構えていた。その巨体は佇むだけで通路をほとんど塞いでしまっている。サーヴァントだ。それが、この迷宮内での最初の戦闘だった。相手はただ一人。巨体の怒り狂った男。対話を試みる暇も与えて貰えなかった。

パウラは相手がバーサーカーであると確信した。しかし、その情報が戦況を有利に変えるわけではない。

むしろ、ランサーの自由を奪うこの状況下をどうするかで頭が一杯だった。ランサーは槍を思う存分に振れず、防戦一方だ。それとは対照的にバーサーカーは思う存分に力を振るう。この通路での戦いに慣れているのだろうか。

退いて上の階に上がれば、すぐにでも追い詰められてしまうだろう。パウラは令呪を一面だけ使い、ランサーの力を引き上げた。ランサーが単純な臂力でバーサーカーを押し出す。二手に分かれている道まで相手を後退させると、パウラたちは右手の道へと走り抜けた。一時的にはあるが、バーサーカーから離れることに成功した。

その後は当てもなく通路を進み続けた。バーサーカーとの戦闘は避けられず、何度も立ち向かうこととなった。これまでに起こったバーサーカーとの戦闘の回数は十を超えている。転進を繰り返し、出口を探し続ける。しかし、活路は見い出せず、成果もない。

——もう、歩けない。

何度、そう思ったか。諦めれば楽になる。何度、立ち止まろうとしたか。いつそのこと、意識を断つてしまえば。全てを忘れてしまえば。

しかしながら、パウラに刻まれた使命がそれを許さなかった。

足を引き摺るようにしてでも歩く。呼吸がままならなくても歩く。むしろ動き続けていなければ、彼女の意識はたちまち失われるだろう。

「パウラよ、どう思う？」

ランサーは歩きながらパウラに声をかけた。

「どう思う……とは、どういうことですか……？」

呼吸も満足にできないまま、パウラは問い返す。

「この迷宮は奥に進めば進むほど、道が複雑になっていく。道を記憶することは困難だ。しかし、不可能ではない。そう、一番の問題は出口がないということだ」

ランサーはパウラを気遣うような素振りを見せず、構わずに返答した。

「入口はあるが、出口がない。出口が塞がれたのではなく、出口がないのだ。入ったが最後、出れない。この迷宮、我等<sup>オレ</sup>にはそのように感じる。そしてパウラよ。お前は、どう思う？」

「……迷宮はおそらく、宝具によるもの……この迷宮を生み出したのは、あのバーサーカーで間違いないでしょう……迷宮の怪物……あのサーヴァントの真名はなんとなく、察しがついています……」

「そうだ。あのサーヴァントの真名は予想がついた。ミノタウロス。迷宮に封じられた怪物だ」

ギリシヤ神話に登場する英霊、ミノタウロス。

クレタ島を支配するミノス王の妻、パシパエは牡牛との間に子を産んだ。子は人の身

体に牛の頭を持って生まれた。生まれついでての怪物は人にとって恐怖の対象でしかない、ミノス王は彼を迷宮へと封じ込めた。

そして毎年、少年と少女が七人ずつ、その迷宮に生贄として捧げられていた。

「しかし、解せないのは出口についてだ。迷宮が英雄によつて踏破された経験があるのなら、必ず出口はあるはずなのだ。しかし、その『気配』がまったく感じられない。この迷宮は完全に閉じられているとしか思えんのだ」

三度目の生贄が選ばれる際、自ら生贄として名乗り出る者があつた。英雄テセウス。彼はミノタウロスを打倒し、脱出不可能とされた迷宮を脱出したのだ。

ランサーは、その点を突きたかつたのだろう。かつて『踏破された経験』を持った迷宮ならば、脱出するチャンスは十分にあるのだと。そう思っていたのだ。

「出口の出現に条件があるのではないのでしょうか……？ 必要な手順や、道具を用意するなどといったものが……」

「必要な道具と手順か。そうになると、事前に真名を知つていて対策を取つていなければ脱出は難しい、ということになるのだろうか。そして、手順とやらが伝説通りならば……」

ランサーは立ち止まった。

すると彼は瞬時に振り向き、パウラの首根っこを左手で掴んだ。力任せに彼女を後方

へ放り投げると、ランサーは右手に持っていた槍を突き出した。

火花が舞った。硬質な音が響く。次いで、獣のような咆哮。凶悪な二振りのラブリスがランサーに迫る。バーサーカーの突きや斬撃はどれも必殺の一撃だ。まともに受け止めれば、防御をした腕は破壊されるだろう。単純な力比べでは決して敵わない相手だ。

しかし、ランサーは槍の柄で幾合もの防御を行った。いずれの攻撃も捌き切り、無傷。柄や体を巧みに動かして、力を分散させたのだ。

驚嘆すべき技術だが、それよりも評価されるのはランサーの精神力だろう。長時間の活動。狭い通路での不利な戦闘。彼の疲労度も深刻なはずだった。いつ集中力が乱れてもおかしくない状況下でありながらも、平時と変わらない冷静さに加え、精彩に富む動き。むしろ、ランサーの集中力は追い詰められるほど上がっているかもしれない。

一瞬の隙を狙って、反撃の一撃。鋭い突きはバーサーカーの肩をわずかに抉った。決定打を与えられないばかりか、傷を負ったバーサーカーは一步だけ退いた。

互いに呼吸を整える間が生まれた。

「脱出に手順とやらがあり、それが伝説通りだというのであるならば……まずは貴様を倒さない限り、脱出の糸口は掴めんということだな。やれやれ、骨が折れる」

バーサーカーに注意を向けながら、チラリと後方のパウラを見遣る。

彼女は床に伏したまま動かない。念話で話しかけてもパウラからの反応はなかった。おそらくは、先ほど投げられたせいで気絶したのだろう。

「ふん、ようやく休んだか。強情な女め。生半可に精神が強い分、肉体の限界を乗り越えて動き続けるとはな。機械ではあるまいに、使命のためなら壊れるまで働き続けるのだからよ。理想的な奴隷、とも言えるか」

「があああああああ！」

二本のラブリウスでバーサーカーが突きを放った。前方に躲せる隙間はほぼない。いや、躲せば後ろにいるパウラが危険に晒されるため、必然的に迎え撃たねばならなかった。

ランサーは左手の籠手で、ラブリウスの一つをわずかな動きで払った。それだけで軌道が大きくそれていく。最小限の動きと力で効果的に突きの軌道を逸らしたのだ。これをやってのけた英霊がすでにいた。ランサーは彼の技術を一度目にしただけで取り入れたのだ。

生み出された空間。その隙へと、ランサーは踏み込む。

火花が激しく舞い散る中、ランサーは槍の刃を相手の顔面に向けて突き出した。

硬質な音が鳴り響く。

「……………化け物め」



ランサーが眩く。

槍の切っ先はバーサーカーの口で捉えられていた。槍はランサーの膂力ではピクリとも動かない。バーサーカーが次の動作に移ろうとする。しかし、それよりも速く、ランサーは電撃的に動いた。

槍から手を離し、相手の顎へと膝蹴りを見舞う。よろめいた隙を狙って、流れるような動きで回し蹴りを見ぞおちに向けて放った。鈍い音とともに、バーサーカーは苦悶の表情を浮かべた。この追撃が効いたのか、巨体をふらつかせて何歩か下がった。

ランサーは呼吸を整え、構え直す。

「疲労困憊。足手まといが一名。立ちふさがるは難敵。逃げることも勝つことも容易ではない。敗北は許されない。これぞ窮地。まさに窮地よ。ゆえに滾るぞ。今度こそ、逆境を乗り越える時だ」

獐猛な獣のような瞳でランサーは睨んだ。

バーサーカーも負けてはいない。鮮烈な光を瞳に宿して、ランサーに立ち向かう。

互いに咆哮を上げ、駆ける。

二振りの巨斧と槍が交叉した。